

# 離乳の発達行動学的研究：

親子間におけるその主導性の分析を中心に

課題番号：09610144

平成9年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書

平成12年3月

研究代表者 根ヶ山光一  
(早稲田大学人間科学部教授)

## は し が き

最近巷をにぎわす子どもの親・大人に対する暴力や親による虐待の例を出すまでもなく、われわれヒトは、子育てにいろいろと悩み、試行錯誤をくり返す動物である。有史以来さまざまな知識の蓄積と経験を重ね、技術革新と情報革命などにより工学的・物質的・知的世界では驚くべき進歩を成し遂げながら、子育ての首尾という点に関しては、われわれヒトはおそらくどの動物よりも問題を抱えた種であろう。

ヒトはそのようなハード面の進歩のひとつの反映として、知識優先・情報優先という価値をいただくことになった。合理性の価値は子育てにも及び、それを専門家の指導のもとに、集団単位で、管理・規格化しながら行うという仕組みが作られてきた。そしてそれはわれわれの子育てを、一昔前とは比べものにならないほどに大変安全・確実に効率のよいものに変えてきた。社会のシステムが深くかつ重層的に介入しているという点は、他の動物と比較したヒトの子育ての大きな特徴である。上記のような子育ての問題に対して、こうした仕組みによる支援は母子にとっての大きな福音となっている。

しかしながら、このような社会の仕組みがただ単に問題を支援し解消するものであるとするのは、一面的なとらえ方というべきであろう。そのような選択がわれわれの子育てにおける問題を助長しているという側面を考慮する必要がある。上に述べた進歩や効率化は反面において、「中枢」に対しての「末梢」や「身体」を相対的に軽んじあるいは疎んじる傾向を生んできたと見ることもできる。そのことは、子育てが本来優れて身体的営みであり、個々の母子の身体性を基盤にした個性的な営みでもあるという事実から目をそらせ、母子から子育ての主体としての位置づけを奪い、専門家の指導に従属することを生んできたかもしれない。そうであるならばその進歩は、ヒトの子育てを援助する要因であると同時に、それを阻害する要因でもあるという両価性をもつことになる。

本研究は、哺乳・離乳という子育ての側面に焦点化し、それがどれほど母子を取りまく社会的支援の仕組みに規定されているか、その実態と要因分析をめざしたものである。調査は1997年度から1999年度までの3年間、全国の3歳児健診の場を

利用して行われた。そして本報告書はその成果を、得られたデータを中心に公表するものである。この報告書は、それ自体科学研究費補助金による研究成果の資料集として単独で意味のあるものであるとともに、そのデータは平成12年度から14年度までの間あらためて行われる科学研究費補助金（基盤研究（B））「日・米・仏の母親における哺乳・離乳の選択とその支援・制限要因の比較研究」（研究代表者：根ヶ山光一）において収集されるデータの対照となる基礎資料としても活用され、それによって1995年に実施された厚生省の離乳指導改定の影響が調べられる予定である。

この調査は研究代表者によってなされたものであるが、もとより質問紙調査・行動観察の両面にわたって、ご参加下さったお母様方のご協力なくしては成り立ち得ないものであった。心からお礼申し上げたい。とくに、このようなお母様方へのアプローチをお受け入れ下さった全国の保健センター（下記）に、この場を借りて深甚なる謝意を表したい。また、観察研究を実施するにあたり、北野病院乳房外来の皆様ならびに母乳育児サークルの皆様にご協力をいただいたことを、心より感謝申し上げます。本研究が、よりよい子育て環境作りの一助になることを心から願うものである。

2000年3月25日

根ヶ山光一

調査にご協力下さった施設等機関一覧（50音順）

愛知県	西尾市保健センター
愛知県	美浜町保健センター
青森県	野辺地町保健センター
茨城県	下妻市保健センター
茨城県	利根川町保健センター
愛媛県	今治市保健センター
愛媛県	丹原町保健センター
愛媛県	五十崎町保健センター
愛媛県	広見町保健センター

大阪府	河南町立保健センター
岡山県	玉野市保健センター
岡山県	柵原町保健センター
沖縄県	具志川市保健センター
沖縄県	城辺町保健センター
鹿児島県	出水市保健センター
鹿児島県	長島町保健センター
鹿児島県	加治木町保健センター
神奈川県	湯河原町保健センター
岐阜県	大垣市保健センター
岐阜県	古川町保健センター
岐阜県	八幡町保健センター
岐阜県	池田町保健センター
熊本県	本渡市保健センター
熊本県	有明町保健センター
熊本県	御船町保健センター
群馬県	館林市保健センター
群馬県	千代田町保健センター
群馬県	新田町保健センター
埼玉県	飯能市保健センター
佐賀県	伊万里市保健センター
佐賀県	太良町保健センター
滋賀県	長浜市保健センター
滋賀県	水口町保健センター
千葉県	白井町保健センター
鳥取県	倉吉市保健センター
鳥取県	若桜町保健センター
富山県	魚津市健康センター
富山県	井波町保健センター
長野県	高山村保健センター
長野県	塩尻市保健センター

奈良県	大宇陀町保健センター
福井県	大野市保健センター
福岡県	八女市保健センター
北海道	室蘭市保健センター
北海道	三石町保健センター
北海道	別海町民保健センター
北海道	美瑛町保健センター
宮城県	牡鹿町保健センター
宮城県	女川町保健センター
山形県	余目町保健センター
山口県	下松市保健センター
山口県	大和町保健センター
山口県	徳地町保健センター

以上 53 機関

## 研究組織名

研究代表者：根ヶ山光一（早稲田大学人間科学部教授）

## 研究経費

平成9年度	900,000円
平成10年度	500,000円
平成11年度	500,000円

## 研究発表

### （1）学会誌等

Negayama, K. Development of reactions to pain of inoculation in children and their mothers. *International Journal of Behavioral Development*, 23, 731-746, 1999. 9.

離乳という母子関係. *行動科学*, 36, 1-11, 1999.9.

Development of parental aversion to offspring's bodily products: A new approach to parent-offspring relationships. *Annual Report of Research and Clinical Center for Child Development*, 1998-1999, 22, 51-58, 2000. 3.

Feeding as a communication between mother and infant in Japan and Scotland. *Annual Report of Research and Clinical Center for Child Development*, 1998-1999, 22, 59-68, 2000. 3.

母性と父性の学際的検討の試み, 緒言. *ヒューマンサイエンス*, 12, 1-2, 1999. 10.

### （2）口頭発表

子どもの身体性刺激に対する親の不快感情からみた子別れの心理機制

日本心理学会第61回大会発表論文集, 235, 1997. 9.

親による子どもの身体産生物への不快感からみた親子の分離 日本発達心理学会第9

回大会発表論文集, S 5, 1998. 3.

母親と乳児におけるくすぐり遊びの発現に関する発達行動学的研究 日本発達心理学

会第9回大会発表論文集, 211, 1998. 3.

胎動に対する語りにみられる妊娠期の母子相互作用: 胎動日記における胎児ボデ

ィ・イメージとcommunicability 日本発達心理学会第9回大会発表論文集,

252, 1998. 3.

About cultural variation in child and adult interaction during everyday

activities. Abstracts of the 14th Biennial Meetings of ISSBD, 211, 1998.

7.

Feeding as a communication between mother and infant in Japan and

Scotland. Abstracts of the 14th Biennial Meetings of ISSBD, 212, 1998. 7.

Development of parental aversion to offspring's body products: a new

approach to parent-offspring relationships. Abstracts of the 14th Biennial

Meetings of ISSBD, 562, 1998. 7.

身体と母子関係 日本心理学会第62回大会発表論文集, S 6 4, 1998. 10.

コミュニケーションと子の自立 日本発達心理学会1998年度公開シンポジウム

「こころを育てるコミュニケーション」1998. 12.

乳児の食行動に対する母親の共感的開口に関する実験的研究 発達心理学会第1

0回大会発表論文集, 133, 1999. 3.

黒田篤志・根ヶ山光一 家庭における母子の隔たりと行動の対応に関する研究  
発達心理学会第10回大会発表論文集, 457, 1999.3.27

菅野幸恵・岡本依子・根ヶ山光一 胎動に対する語りに見られる妊娠期の母子関係  
(2) -胎動日記における母親の感情の変遷- 1999.3 共著 発達心理学会  
第10回大会発表論文集, 502.

根ヶ山光一 発達と身体資源(1) 胎児・乳幼児と母親の身体分離 発達心理学会  
第10回大会発表論文集, 125, 1999.3.

大人が用意する「モノ」環境は子どもの発達をいかに規定するか. 日本心理学会第  
63回大会 1999.9.

ヒトの家族と子育ての特質 発達心理学会第11回大会 「社会変動と家族の発達・  
個人の発達」2000.3.

母子の身体的交流をとらえる観察 発達心理学会第11回大会 「柔らかい方法に  
よって観察される社会-情緒的発達の世界」2000.3.

### (3) 出版物

たべる：食行動の心理学 (中島義明・今田純雄編) (中島・今田・松田・中野・  
太田・根ヶ山他, 計13名) 朝倉書店 第4章, 離乳期までの食行動 66-78,  
1996.9.

たべる：食行動の心理学 (中島義明・今田純雄編) (中島・今田・松田・中野・  
太田・根ヶ山他, 計14名) 第8章, 老年期の食行動 132-145, 1996.9.

看護実践のための心理学 (河合優年・松井惟子編) (河合・廣岡・池上・中澤・平  
石他, 計52名) メディカ出版, 第9章, 人の生活空間と心理 84-92, 1996.11.



文化心理学 (柏木恵子・北山忍・東洋編) (藤永・北山・箕浦・東他, 計15名)

東大出版会 第7章, 親子関係と自立: 日英比較を中心に 160-179, 1997. 11.

食行動の心理学 (今田・志村・根ヶ山・志賀) 培風館 第3章, 行動発達の観点から 41-68, 1997.12.

サルとヒトのエソロジー (糸魚川直祐・南徹弘編) (南・小山・鎌田・安藤・根ヶ山他) 培風館 第13章, 離乳と子の自立, 134-147, 1998. 3.

健康スポーツの心理学 (竹中晃二編) (竹中・橋本・楠本・征矢他) 大修館書店 第11章, 心理発達におよぼす身体活動の影響, 116-124, 1998. 4.

社会と家族の心理学 (東洋・柏木恵子編) ミネルヴァ書房 母親と子の結合と分離: アタッチメント理論の検討を通して 23-45, 1999. 9.

## 目次

目的	1
研究1：離乳に関する全国調査	
目的	6
方法	6
結果と考察	
A. 全体の単純集計	9
B. 要因に基づく分析	
1. 3地域比較	24
2. 市郡差	29
3. 出生順位	31
4. 母親の就労	35
5. 母親の最終学歴	36
C. 離乳関連の変数相互の関連性	
1. 母乳の終了時期	38
2. 断乳か子まかせか	43
3. 人工栄養使用の有無	49
4. 母乳終了の方法は子のためか自分のためか	52
5. 離乳の早遅への考え方	53
6. 離乳時期は子のために決めるか自分のためか	55
7. 離乳方法・スケジュール決定の根拠	56
総括	59
引用文献	63
研究2：断乳（桶谷式）と卒乳（ラ・レーチェ・リーグ）の比較	
序	67
桶谷式断乳の研究	68
方法	69
結果	69
考察	73

ラ・レーチェ・リーグによる卒乳過程の追跡観察	75
目的	75
方法	75
結果	76
考察	77
総合論議	78
引用文献	80
巻末資料1	83
巻末資料2	84

## 目的

母子関係は繁殖上の子の保護システムである。母親は、妊娠中は胎盤によって、そして出産後は乳腺によって、それぞれ子の栄養の要求を満たしてやる。それは子の食における母親による代行作業であるとも考えられ、離乳とはその代行作業の削減過程でもある（根ヶ山，1996a）。

母子間には、いわゆる親和的な関わり合いだけでなく、反発的相互作用が存在している（Mahler, Pine, & Bergman, 1975；根ヶ山，1989；Rijt-Plooij, & Plooij, 1993）。社会生物学は、そのような母子間の反発性と子別れ行動の適応的な意味について、重要な考察を行ってきた（Trivers, 1974）。そこでは、親にとって子育てが子を通じて自分の遺伝子を残すための投資だという。投資である以上、コストがかかる。親はそのコストを引き受けながら、将来の利得のために子を保護し世話する。子の栄養摂取を親が代行するのは、まさにそのような意味だというのである。

そう考えると、栄養資源摂取の自立化である離乳が、母子関係の発達的变化を支える基底的な枠組であることがわかる。ところがヒトの場合、が強制的に離乳させる断乳と、子の自発的離乳を待つ卒乳とが併存する（根ヶ山，1997）ことに明示されるように、離乳の仕方にはきわめて大きな多様性がある（WHO, 1981）。これは親・子間の発達の主導性に関わる重要な問題である。Raphael-Leff（1983）は、自らの臨床経験や質問紙調査をもとに、マザリングのタイプに許容型（facilitator）と統制型

（regulator）があって、それは妊娠の初期から分類可能であるという。それによれば、許容型の母親は頻回で受容的な要求授乳を行う一方、統制型の母親は時間決めの授乳を行い、離乳食をより早く導入する傾向がある。また許容型は統制型と比べると、自分を個人としてよりも母親として同一視し、子の主体性をより重視し、子と同室で寝る傾向がより強いという。それにとどまらず、許容型は妊娠を通じて自分の女性としてのアイデンティティを強めるが、統制型は逆に妊娠をアイデンティティへの脅威と受けとめるとか、許容型は出産時に子に親近感をもつが、統制型は疎遠感をもつといった特徴も指摘している。もちろんこれはあくまでも一般的な傾向をいったにすぎないが、このような観点から母子関係を理解することは、子の発達における親と子の主導性を考える上で非常に示唆的である。

にもかかわらず、従来、心理学的にこのような問題に対し正当な検討がなされてきたとはいえない。それはつきつめれば、離乳や親子分離に対する発達心理学の軽視、という根本的な問題点にたどり着く。本研究はそのような問題意識のもとに計画され

たものである。

ヒトの哺乳と離乳は、母子の身体間で行われる行為であるが、しかしながら両者の身体だけで完結しているものではない。たとえば哺乳ビンと粉ミルクという道具が母子の周辺には存在するし、また妊娠中から母子は医療機関の世話になりながら、その指導を受けつつ子育てを進めている。育児雑誌の記事や隣人の忠告、土地のしきたりなどによって子育てのしかたが規定されることもある。いいかえればヒトの子育ては、そのようなさまざまな既定要因によって何重にも取り囲まれているのであり、その指摘はBronfenbrenner (1979) のいう生態学的視点をとることに他ならない。親が自分自身や子の能動性をどう評価し、それらの既定要因に対してどのような姿勢をとるか、といったことによって離乳における主導性のあり方が異なるであろう。

本研究のめざすところは、発達初期の母子相互作用やアタッチメントなど、親和的關係観に偏重した従来の発達心理学に対する疑問提起でもある(根ヶ山, 1995)。離乳は社会生物学的には、親子間の対立相をはらんだ過程であるとされ、そのような観点をヒトにも適用することによって、新たな母子関係観を導くことができるのではないかと考えられる。研究代表者が過去に行った霊長類の離乳に関する種間比較研究(根ヶ山, 1996b)をもとに結果を単純に予想するならば、子主導の離乳法が子どもの行動の摂理と整合性の高い離乳手法として確認されるであろうと思われる。が、そのような生物学的整合性は、たとえば子どもが「授かる」対象から「つくる」対象へと推移していること(柏木, 1999; 中山, 1992)や、子どもに対する分身感が乏しいと実感している母親の育児観(柏木・若松, 1994)やライフスタイルとは必ずしも整合しないかもしれず、そこに地域や学歴・職業による差が認められるのではないかと考えられる。育児は親子の相互「個」化過程であり、母子関係のみならず、他の家族関係、さらに地域社会や制度との関係、あるいは子どもを取り巻く「モノ」との関係など、大きなネットワークのなかに位置づけられるべき問題であろう(Valsiner, 1997)。そのような事実を明らかにすることは、育児・離乳という窓口を通して、我々現代人の生活行動様式における生物性・文化性の関与を指摘するという意義をもつ。

本研究では、このような問題意識を背景にもちながら、具体的にはマクロな課題として、日本において現在行われている離乳がどの程度まで親・子主導的であるのかの実態を全国的規模で調査し、それが今日どのような要因によって規定されているの

か、離乳様式を選択が現在の母子関係や母親のライフスタイルとどう関わっているか、などを明らかにすることを試みる（研究1）。ミクロな課題として、断乳（桶谷式）と卒乳（ラ＝レーチェ＝リーグ）という二つの対極的とされる離乳様式を実践する母親にアプローチし、実際の授乳や離乳場面での母子行動を観察することによって、それらの母・子における意味を考察する（研究2）。

## 研究1：離乳に関する全国調査



## 目的：

今日、日本において行われている離乳のスタイルについて、広く全国規模で質問紙調査を行い、その実態を明らかにするとともに、その選択に関しての背景要因や母親の意識構造といったそれを取りまく背景要因の検討を行う。

## 方法：

特定の限られた地域だけでサンプリングすると、その土地の風習や価値観、あるいは産業の構造などを反映した偏りが結果に生じかねない。子育てのような営みには、とくにそういった影響が色濃く影を落とす可能性がある。そこで、なるべく日本で行われている離乳の全体像を適正に反映するサンプリングを行うため、全国の3歳児健診実施施設（保健センター）を財団法人健康・体力づくり事業財団編「全国健康増進施設一覧」（1987）に記載された実施施設について、まず都道府県をその記載順に原則として一つおきを選定し、調査依頼対象地域とした。さらにそれらの地域のそれぞれについて、その市部・郡部の人口比に近くなるようにその地域から市・郡を各最低1箇所選んだ。そのような作業の結果、全国で合計81箇所の市部・郡部を選定した。

さらに、1997年6月に、その81箇所に所在するすべての保健センターに対し、巻末資料1のような往復はがきによる調査依頼の打診を行った。それに対する返信によって52の保健センターから協力の回答をいただいた（「はしがき」参照）。それにしたがって、そこに配付可能部数として回答された数の質問紙（巻末資料2）と依頼状及びその返信用封筒を郵送で届け、1997年10月までに開催される3歳児健診の場において、保健センター側から個々の母親に直接手渡しで配付していただいた。送付した質問紙の総数は合計3670部であった。その調査に協力するか否かは全く母親の自由意思に任せたところ、合計933部の回答が寄せられた（回収率：25.4%）。その中には2歳以下の子どもが10名含まれていたため、それらを分析対象から省くことにより、結局3歳児健診の対象者としての有効回答数は923部、有効回答率は25.1%となった。子どもの平均年齢は3歳6か月、標準偏差は3.4か月であった。

表1 回答が発送された地域と回収部数（質問2）

北海道	74
青森	9
宮城	17
山形	9
茨城	37
群馬	99
千葉	29
埼玉	22
神奈川	9
長野	19
富山	37
福井	28
岐阜	92
愛知	127
滋賀	52
大阪	7
奈良	3
岡山	28
鳥取	23
愛媛	64
山口	29
福岡	17
佐賀	19
熊本	19
鹿児島	36
沖縄	14
不明	4
総計	923

一方、母親の年齢は31.5歳、標準偏差4.1歳であった。表1は、回収された質問紙がどの地域から返送されたものかを示したものである。以下の結果は、すべて

その最終有効回答をもとに行っている。

それらのうち対象となった子どもの出生順位の記載があったのは918部であり、出生順位の平均は1.72番目、標準偏差0.78であった。第1子が428名(46.6%)、第2子以降が490名(53.4%)とほぼ同数であった。また子の性別の記載があったものは912部で、男児が442名(48.5%)、女児が470名(51.5%)とこれもほぼ同数であった。

さらに、母親が専業主婦であったか否かについては、記載のあった906部のうち専業主婦が523名(57.7%)、それ以外が383名(42.3%)であった。専業主婦以外の母親がどのような就労形態であったかは、表2に示されている。

表2. 母親の現在の就労状況(質問6)

	度数	パーセント
フルタイム	153	16.9
パート	119	13.1
自営業	78	8.6
専業主婦	523	57.7
その他	33	3.6
合計	906	100.0

表3. 母親の最終学歴(質問7)

	度数	パーセント
中卒	22	2.4
高校卒	451	49.6
専門学校卒	141	15.5
大学・短大卒	291	32.0
大学院卒	5	.5
合計	910	100.0

一方母親の最終学歴は表3に示されたとおりであり、それを高卒までとそれ以上(専門学校, 短大, 4年制大学, 大学院)に分けると、記載のあった910名のうち前者が473名(52.0%)、後者が437名(48.0%)となり、ほぼ半数ずつとなった。

また子どもの世話をおもに誰がするかもあわせて尋ねたところ、圧倒的多数が母親であると答えたが、祖母であるという回答も8%ほどあった(表4)。

表4. 子どもを主に世話する人(質問9)

	度数	パーセント
祖父	4	.4
祖母	74	8.3
父親	4	.4
母親	786	87.7
その他	28	3.1
合計	896	100.0

結果と考察：

A. 全体の単純集計

このような全国規模の実態調査は、文化比較や時代比較などの資料としての意味も大きいと思われるので、まずは全国調査の単純集計結果を一括し、全体でどのような傾向があったかを概説することにする。質問紙に配置された質問項目の順に見ていく。

今回の調査対象者となった母親は、その回答内容から、ほとんどが母乳哺育を行っていたことがわかる(表5)。そしてその開始月齢は当然ながら0か月齢が圧倒的に多いが、1か月齢以降という母親も皆無ではなかった(図1)。

表5. 母乳哺育を行った母親(質問10-1)

	度数	パーセント
はい	881	96.284
いいえ	34	3.716
合計	915	100.000

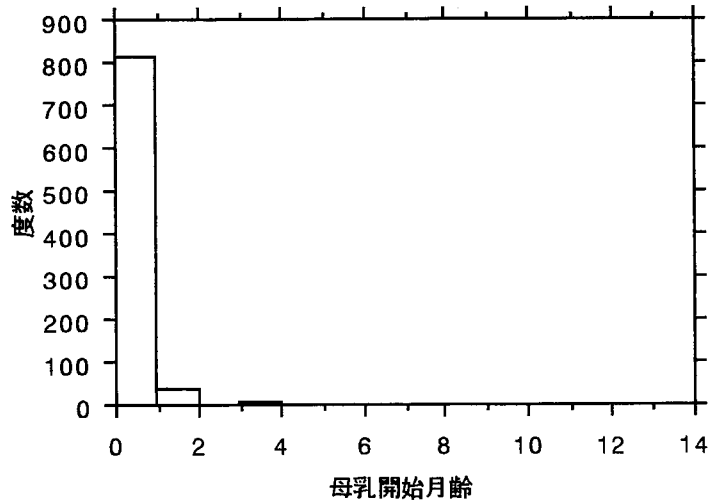


図1. 母乳開始月齢による人数分布 (質問10-2)

他方, 1歳を過ぎると急速に母乳を与える母親が減少し, 1歳が母親達にとっての離乳時期の大きな目安となっていたことが明らかである(図2). その他, 1歳半, 2歳という節目の年齢で終了するケースも, それぞれその周辺の時期に比べると相対的に多い. このような節目の時期に子どもの自発的な心理・行動的变化が集中して生じるとは考えにくいため, 離乳の多くが母親によって設定された目標時期への到達を待って母親の意思により行われていたことが示唆される.

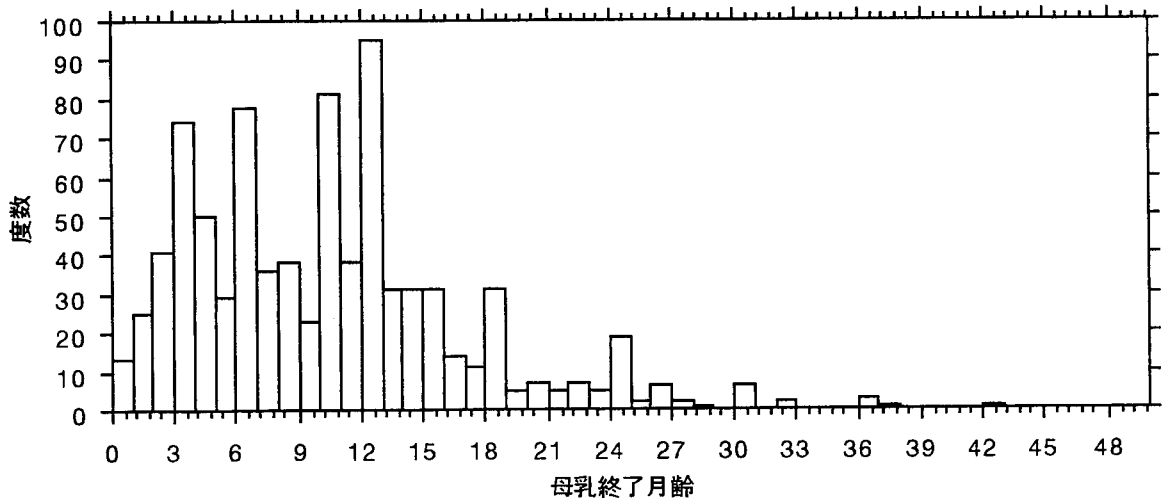


図2. 母乳終了月齢 (質問10-3)

このように1歳になった時点での母乳離乳について、その時期決定に大きくあずかっていたと考えられる要素に、厚生省からの離乳指導がある。1995年12月に厚生省児童家庭局母子保健課から全国の関係官庁に、「改定・離乳の基本」（母子衛生研究会，1997）が通達として出されるまでは、1980年に厚生省心身障害研究の「離乳食幼児食研究班」の研究成果として発表された「離乳の基本」（今村，1981）が、15年にわたって日本の離乳の公的指針として広く行き渡っていた。この研究対象となった母親達が離乳を行ったと考えられる時期は、この「離乳の基本」のもとに指導が行われていた時期である。ここでの結果から、母親達はその影響を強く受けつつ育児の方針を決定していたという実態がうかがわれる。

一方、母親達は人工栄養もよく使用し、母乳と人工栄養の両方を混用しながら子育てを行っていたことがわかる（図3）。

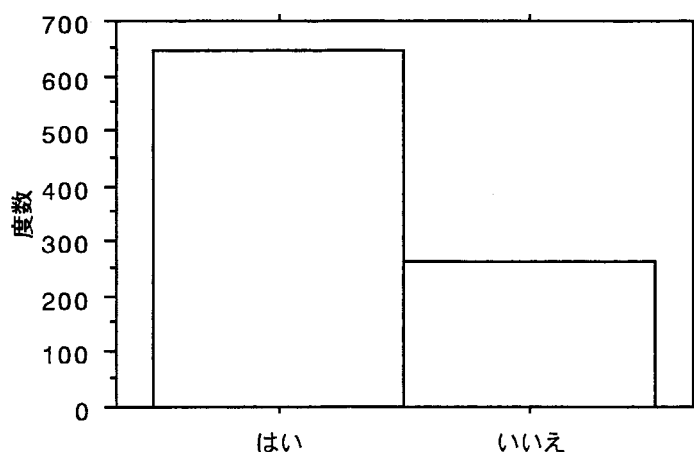


図3. 人工栄養の使用（質問11-1）

図4によれば、人工栄養の導入は生後1か月以内が圧倒的に多く、子の成長に伴って補助栄養として与えられるというよりも、かなりの母親によって出産直後から母乳と併用されていたことがうかがえる。また、その終了時期は、母乳の場合よりも後傾しているが、やはり1歳、1歳半、2歳という節目の時期に集中しており、母親の意

思によって切り上げられていることが、母乳の場合よりも一層顕著であった（図5）。

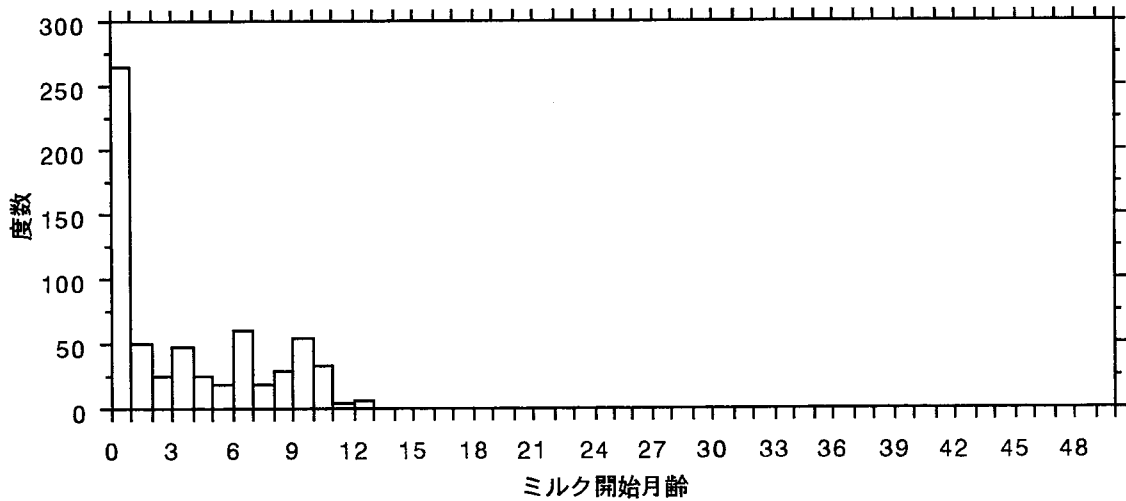


図4. 人工栄養の使用開始月齢（質問1 1-2）

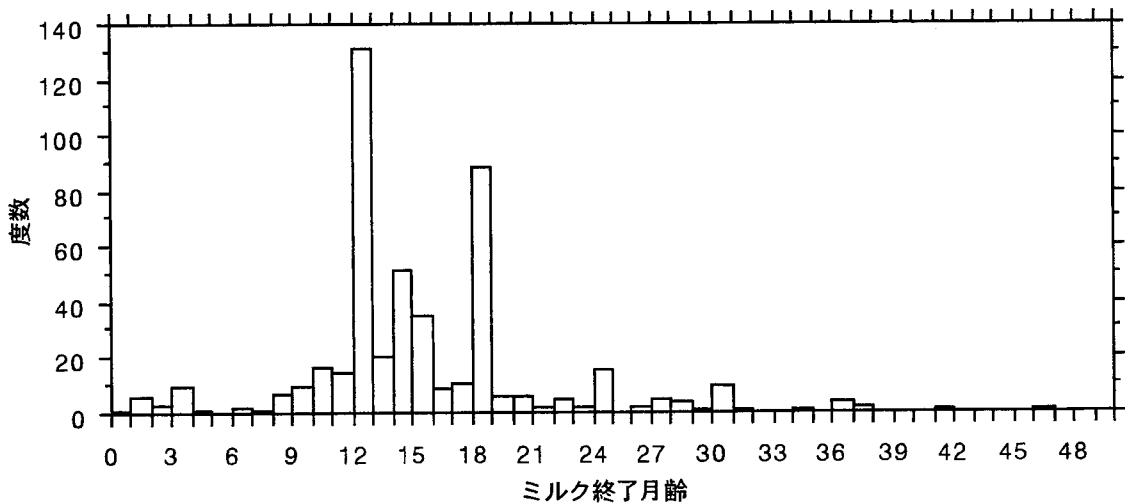


図5. 人工栄養の終了月齢（質問1 1-3）

離乳食は、ほとんどが5か月齢を中心とする数カ月という狭い期間に開始されている（図6）。これらの離乳にかかわる時期の選定を行っているのは疑いもなく母親であるが、その背景にはそれらの実践の指針となるべきかなり強力な情報が存在し、母親はそれにしたがって自らの子育てにおける離乳の進め方を判断している様子が見られる。

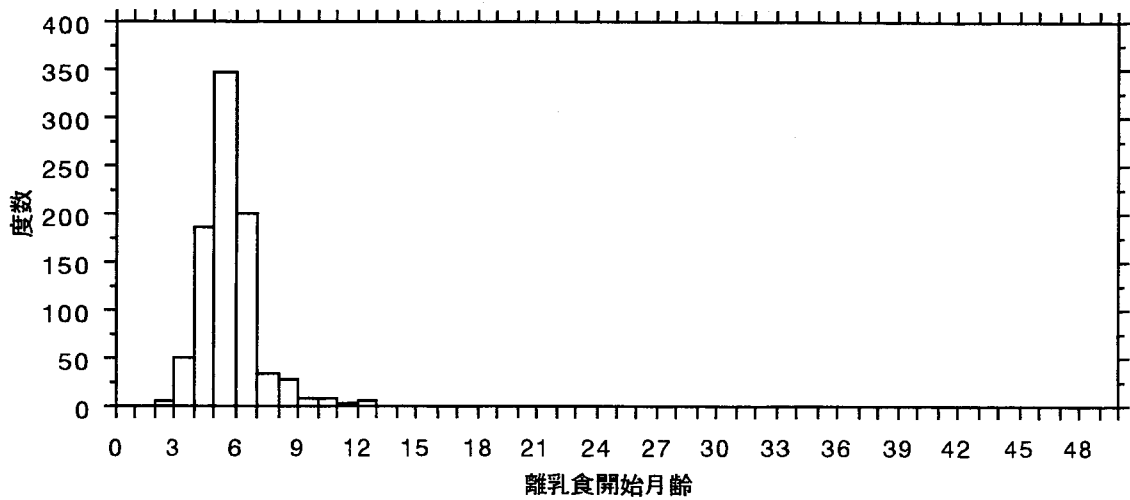


図 6. 離乳食の開始月齢 (質問 1 2)

母乳以外の食物・飲み物を与えるにいたった最大の理由としては、図 7 にあげたようなさまざまなものがあるが、そのなかでも実際に母親に導入を決断させているのは、「母乳の出具合」「子の月齢」「母乳以外への味慣らし」の 3 つが圧倒的に大きな理由であった。

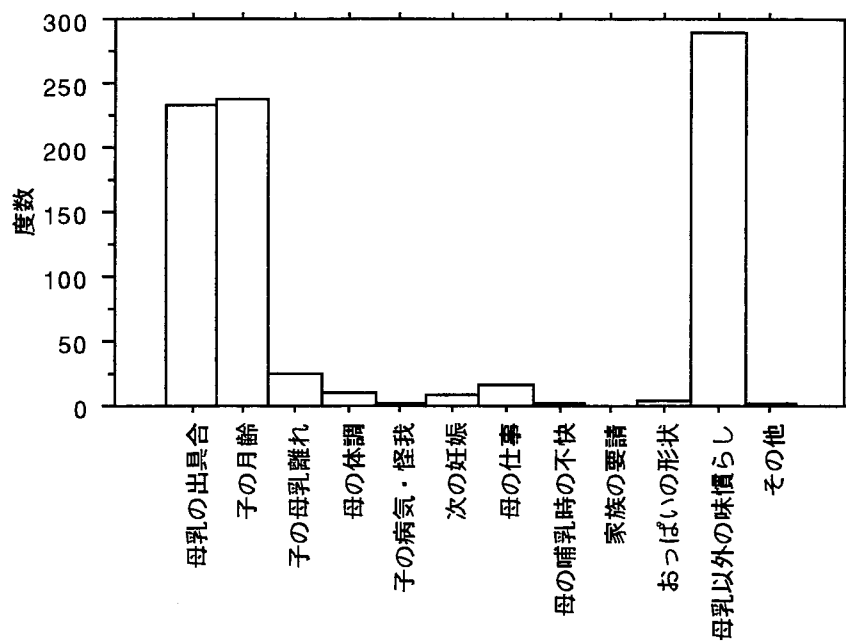


図 7. 母乳以外のものを与え始めた理由 (質問 1 3)



母乳をやめるときどのようにしたかを尋ねた結果は、親が時期を決めて断乳したとするものが516名、断乳せずに子どもに任せたとするものが166名であり、それ以外は母親・子の体調や母乳不足などの不可抗力によるものが多かった。このように、その多くは母親の決断によって離乳がなされていた（図31も参照）。

母乳をやめる際には、乳房に何も施さない場合が多かったが、なかには離乳を成功させるために、何らかの物質を乳首に塗ったり、乳房に絵を描いたり、乳首に絆創膏を貼ったりというように手を加えたケースもある程度あった（図8）。

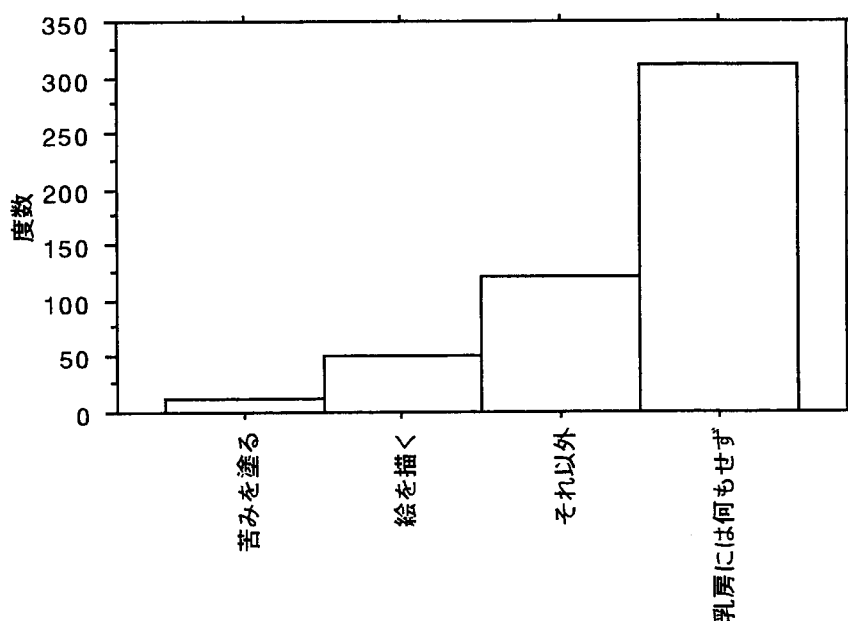


図8. 母乳をやめる方法（質問14）

1歳以降、乳房に加工することが増え、その中でも絵を描くというのが典型であった。この典型が桶谷式断乳（桶谷，1982）である。

母乳をやめる最大の理由を一つだけ選択してもらったところ、子どものためにやめたというケースが約半数であり、残る半数が母親自身のためやそれ以外のためという理由であった（図9）。「それ以外の理由」としては、母乳が出なくなったというものが多かったが、それ以外に「妊娠」「病気」などがあげられていた。

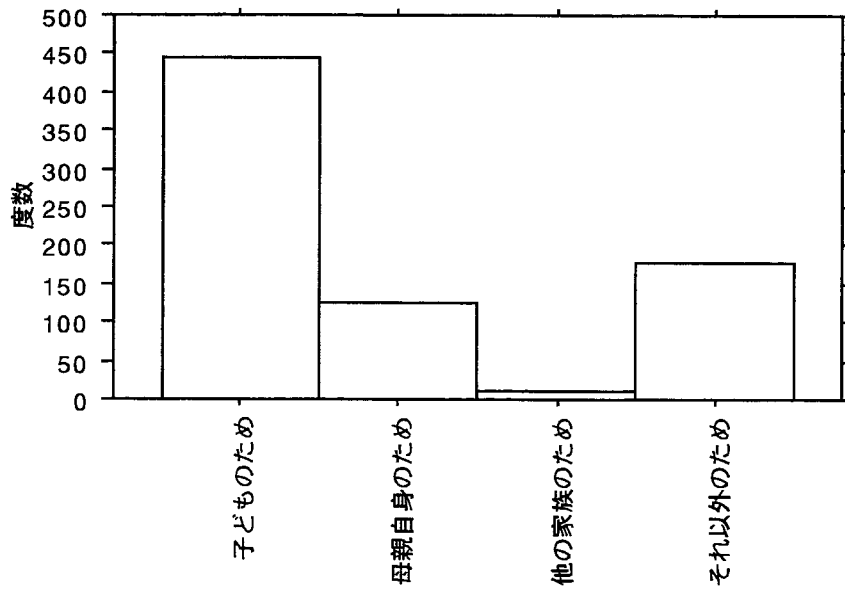


図9. 母乳をやめた理由（質問15）

離乳が完了したときにどのような感想をもっとも強く持ったかという問いに対する回答が図10に示されている。肯定的・否定的なさまざまな感想がもたれているが、なかでも「ホッとした」という母親の安堵感や「達成感」が大きく、それ以外に「悲しみ」「寂しさ」という軽い否定的感情も見られた。

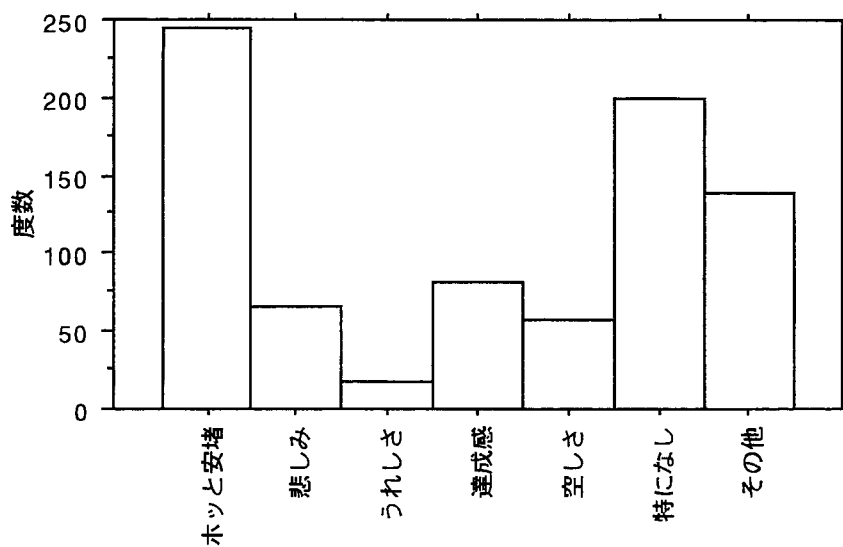


図10. 離乳完了の感想（質問16）

離乳を完了した最大の原因（図11）は、母乳以外のものを与えだした理由（図7）と似ているが、両図を比較すると、離乳完了の原因としては子の月齢が特に多いことと、子の母乳離れが増加していること、子の食べ具合も大きな要素であったことがわかる。

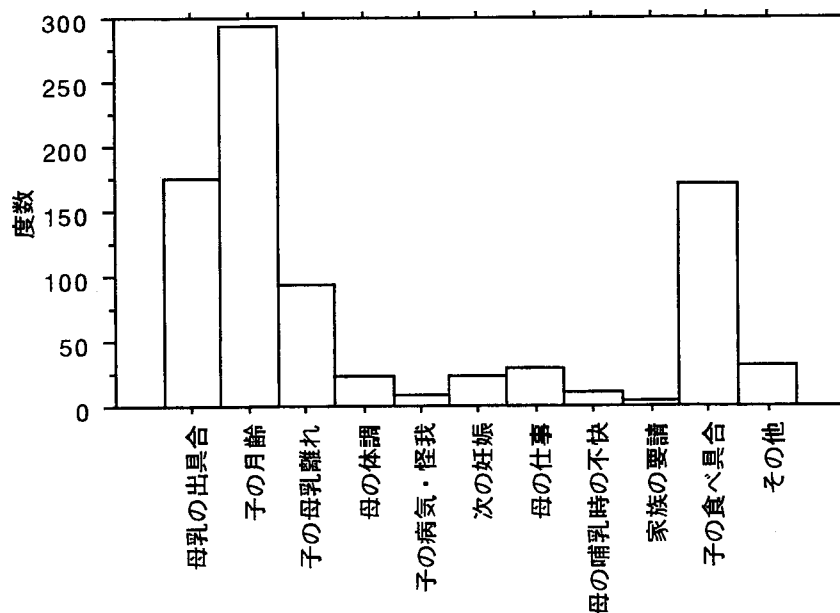


図11. 離乳の原因（質問17）

この点を主導性の所在（子まかせか、断乳か）とクロスさせてみると、断乳を選択した母親は子の年齢を離乳の理由として挙げるが多かった（図12）。

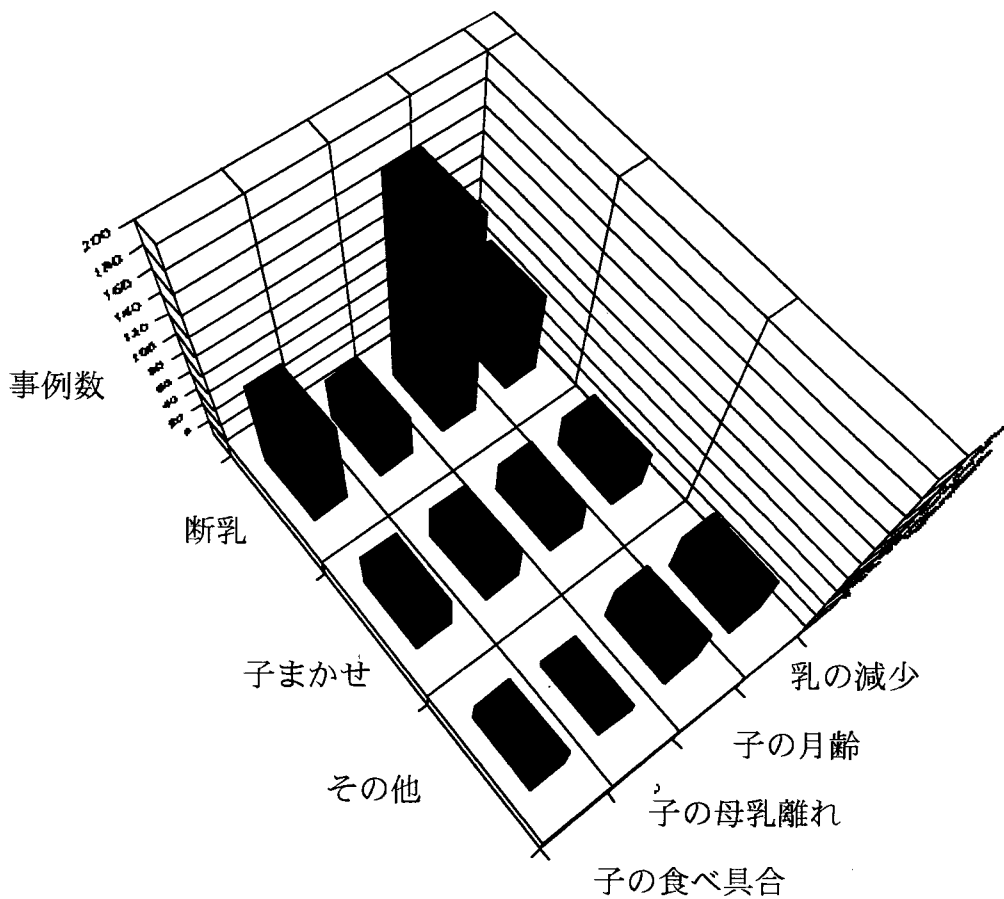


図 1 2. 離乳の主導性と離乳の理由の関連性

離乳の時期は強いていえばなるべく早い方がよいか、それともなるべく遅い方がよいかを尋ねたところ、図 1 3 のような回答傾向であり、やや早い方が多かったものの、回答は相半ばした。

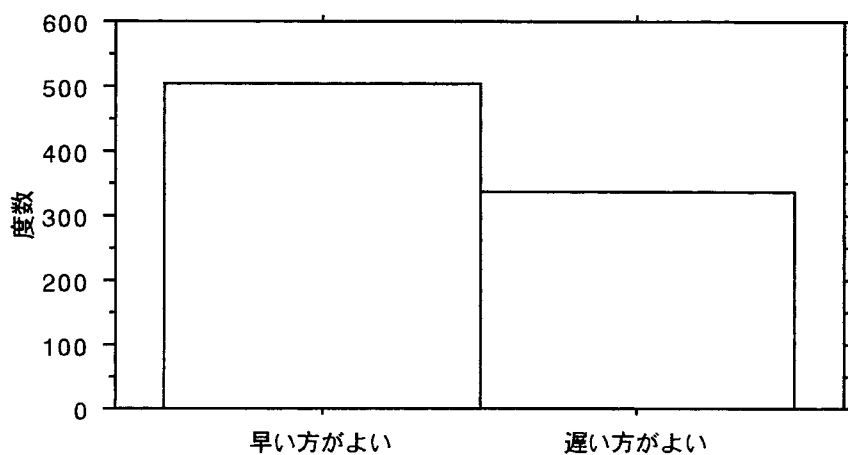


図 1 3. 離乳の時期 (質問 1 8)

図13でその時期がいいと考えた理由は何かという問いに対し、図14にあるように、それは子どものためであるとする母親が圧倒的に多かった。図9とともに、母親は一貫して子どものために離乳を進めてきたことがうかがえる。

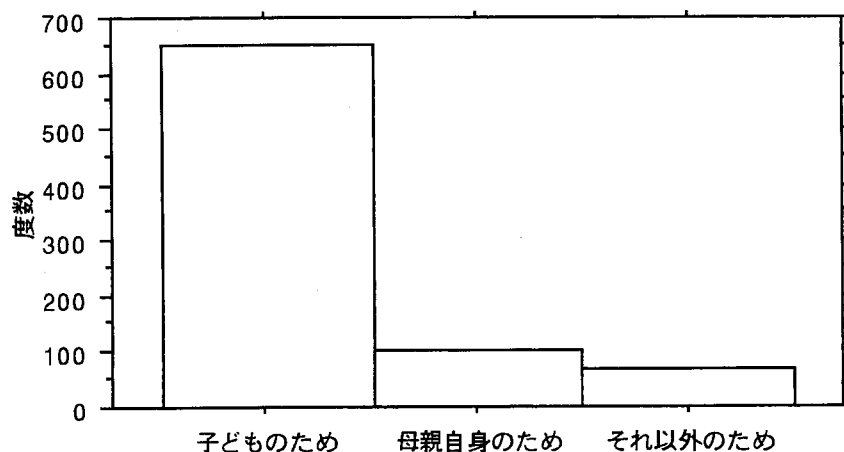


図14. 離乳時期の理由（質問19）

母親は、離乳の方法やスケジュールについて、さまざまな情報源をもとに意思決定している。図15が母親のもっとも準拠したとされる情報源の分布の内訳であり、「子の様子」や「母親自身の考え」にしたがって判断する母親が多いものの、相当多数の母親が「医師・保健婦」「書物・マスコミ」といった専門家の情報を求め、残るある程度の者が「親」「知人」を情報源としていた。離乳はこのようにさまざまな情報源に基づいて行われていたことがわかるが、これらの情報はまた時代や地域によってことなるものでもありうる。先に述べた母親の離乳の決定における暦年齢的な節目の存在や時期の斉一性は、こういった情報のなせる部分が大きいことが考えられる。このことは育児における母親と子どもの主体性を左右する要素であるが、さらに、その複数の情報に矛盾が存在すると、それは母親に混乱や不安をもたらすであろう。こういった情報の存在や、それを提供する専門家の存在の意味やあるべき姿といったものを今後検証しなければならない。

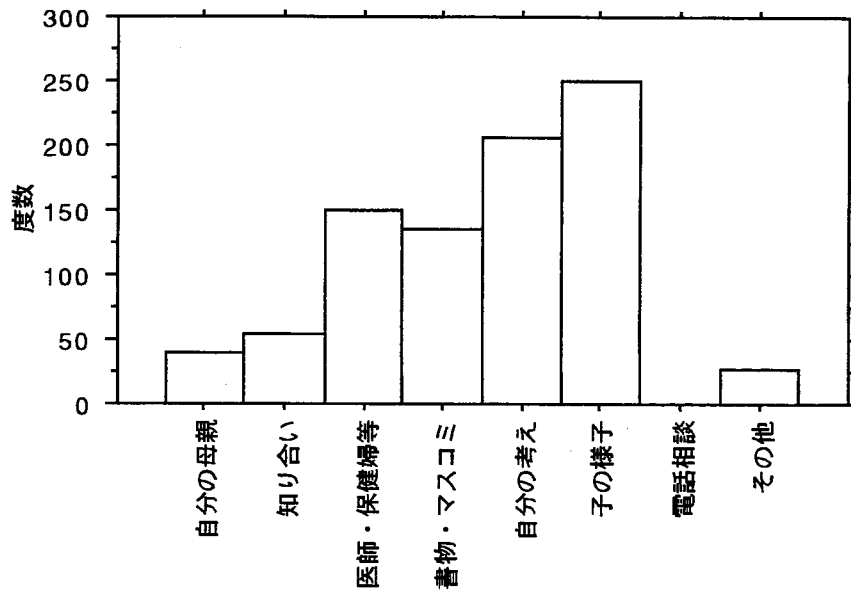


図15. 離乳の指針源 (質問20)

離乳の仕方や時期についてどの程度指導を受けたかを尋ねたところ、図16のように母親の多くは頻繁に指導を受けるということにはなかった。とくに、「まったく受けなかった」という回答を寄せた母親も少なからず存在した。指導を受けたことのある母親は、その指導が役に立ったかどうかについて、図17に見られるように、判断がまったく半ばしていた。さらに、そのような専門家の離乳指導にしたがうべきだという意見に対して、多くの母親はどちらかといえば賛意を表明しているが、どちらかといえば反対という意見の母親も少なからず存在し(図18)、結局専門家の指導に対してはおおむね肯定的であるとはいえるものの評価が定まらず、母親全体としてはそういった指導に意味を認めつつも、体験的には相対化して受けとめようとする姿勢がうかがえた。

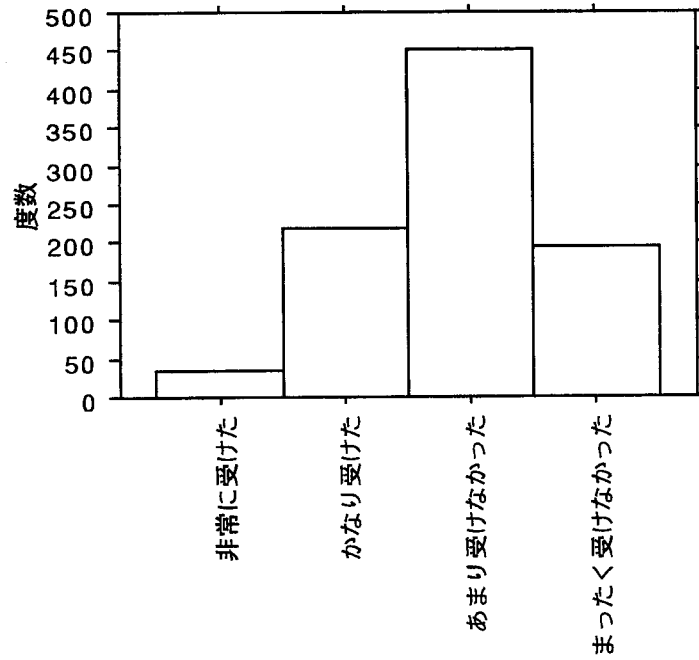


図16. 離乳指導を受けた経験 (質問21)

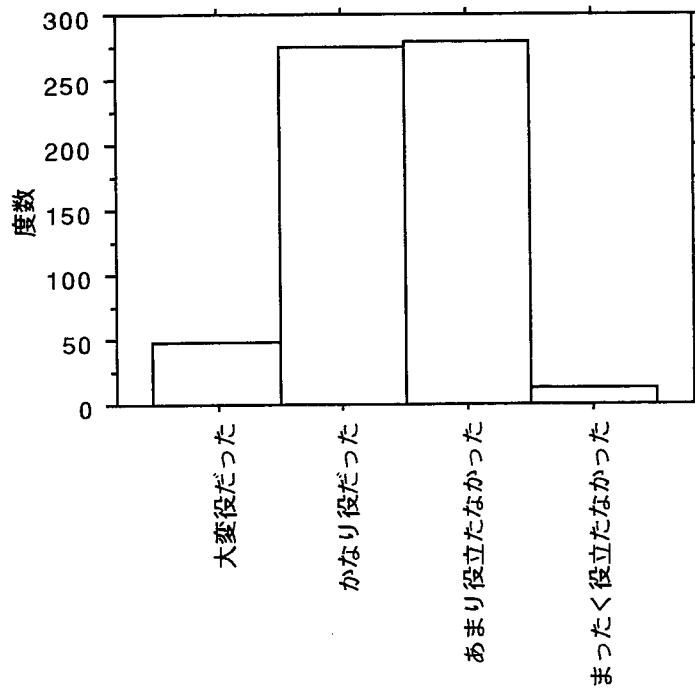


図17. 指導の評価

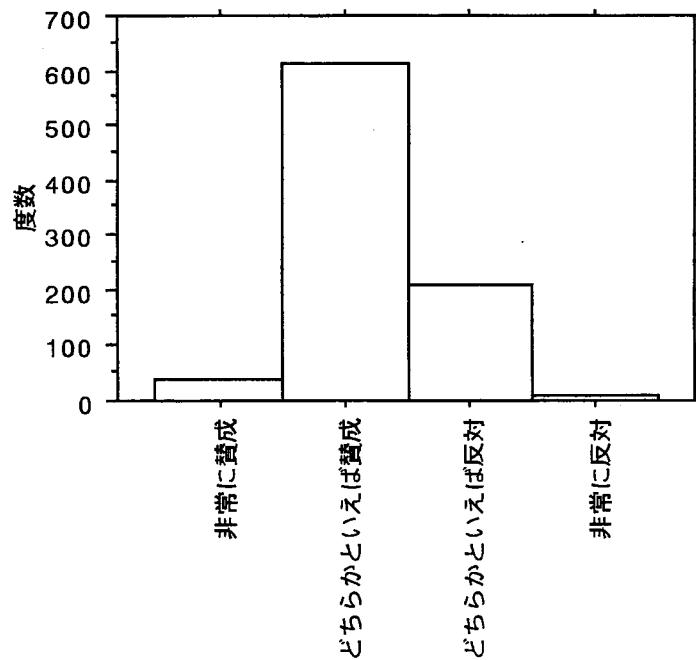


図18. 専門家の指導に従うべきか（質問23）

母乳・人工栄養・ベビーフード・手作り離乳食という4種類の子ども用の食品について、栄養価・衛生的・経済的・手軽・安心・味・健康的・愛情の8項目に対する評価を4件法（「1=違う」から「4=その通り」まで）で尋ねたところ、図19のような結果となった。これを見ればわかるとおり、母乳が母親にとって全般にわたって非常に好イメージをもった食物であった。母乳の代替物である人工栄養は、総体として母乳よりも評価が低い、とくに経済性・簡便性・愛情において低く評価されており、母親のイメージのなかでは母乳と相当異なる食物であったことがわかる。



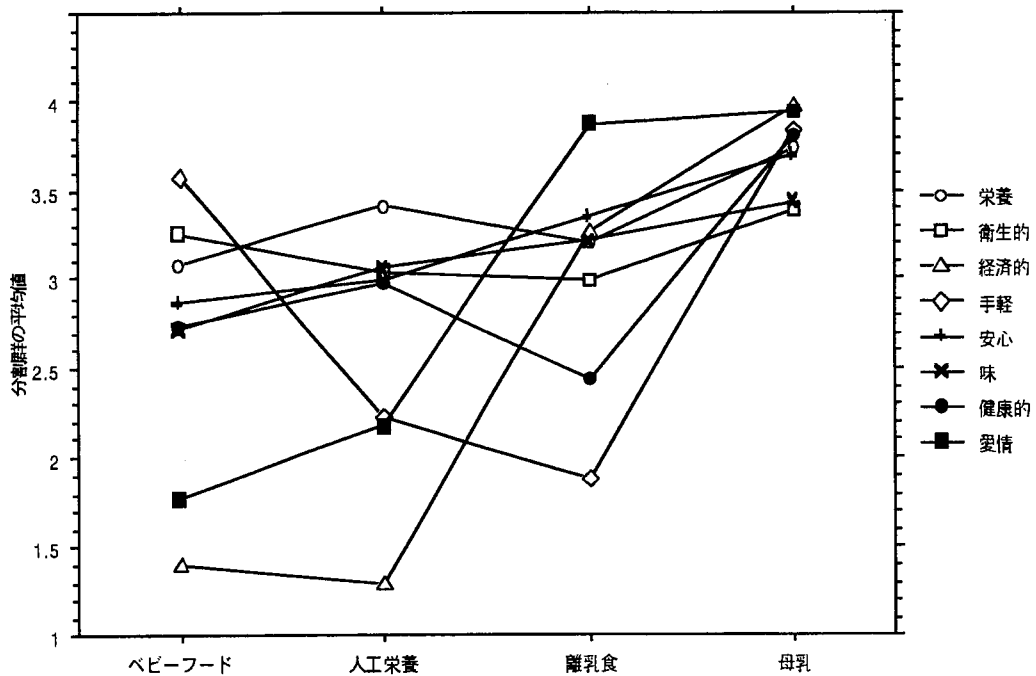


図19. 4種類の食品の比較 (質問24)

母親の育児観を、大日向 (1988) をベースにして18項目により4件法で尋ね、その結果に因子分析 (主因子法, 直交バリマックス回転) を行い、最終的に11項目をもとに、母親の育児についての考え方がいかなる因子によって構成されているのかを明らかにした (表6-1, 2)。

表6-1. 育児への考えに対する因子分析

	因子1	因子2	因子3
母親であることが好き	.734	-.095	.120
子育てが負担	-.608	.361	.028
子の要求尊重	.070	.044	.817
母親である充実感	.740	-.001	.279
子供をうまないほうが良かった	-.658	.106	.095
母親になって気持ちが安定して落ち着き	.643	.118	.282
自分は母親として不適合	-.564	.404	-.188
母親であることに生きがい	.780	.071	.261
子の個性最大限尊重	.215	-.141	.756
自分の関心は子供ばかりで、視野が狭くなる	-.061	.816	-.075
母親としているときが最も自分らしい	.555	.423	.189

表6-2. 固有値ならびに変動率

	固有値の大きさ	変動率
値1	4.058	.369
値2	1.206	.110
値3	1.093	.099

その結果、3つの因子が抽出された。表6-1における因子負荷量をもとに解釈したところ、第1因子は「肯定的母性感情」の因子、第2因子は「子育てに対する否定的感情」の因子、第3因子は「子どもの個性尊重」の因子であると考えられた。

## B. 要因に基づく分析

以上は全国データを一括して離乳の実態を概括したものであるが、次にデータをいくつかの要因によって分割・比較し、それらの要因がいかに関与するかを検討する。複数の要因をまとめて分散分析を行うことも可能であったが、ここでは話を単純化するため、個別に検討することを選択した。

### 1. 3地域比較

表7. 都道府県別にみた母乳終了月齢

		平均	標準偏差	標準誤差	例数	最小値	最大値	欠測値の数
母乳終了月齢	合計	9.891	6.557	.226	842	0.000	42.000	81
母乳終了月齢	愛知	9.942	5.860	.535	120	0.000	32.000	7
母乳終了月齢	愛媛	8.448	6.478	.851	58	0.000	36.000	6
母乳終了月齢	茨城	9.172	7.769	1.443	29	0.000	30.000	8
母乳終了月齢	岡山	9.615	5.776	1.133	26	2.000	23.000	2
母乳終了月齢	沖縄	9.923	7.388	2.049	13	1.000	24.000	1
母乳終了月齢	岐阜	11.500	7.174	.765	88	0.000	36.000	4
母乳終了月齢	宮城	10.400	10.868	2.806	15	2.000	42.000	2
母乳終了月齢	熊本	8.647	6.422	1.558	17	0.000	18.000	2
母乳終了月齢	群馬	10.276	6.585	.706	87	0.000	26.000	12
母乳終了月齢	佐賀	7.000	5.727	1.432	16	0.000	20.000	3
母乳終了月齢	埼玉	6.895	3.871	.888	19	2.000	12.000	3
母乳終了月齢	山形	4.857	5.305	2.005	7	0.000	13.000	2
母乳終了月齢	山口	9.538	5.537	1.086	26	1.000	22.000	3
母乳終了月齢	滋賀	9.157	5.808	.813	51	1.000	30.000	1
母乳終了月齢	鹿児島	9.545	4.887	.851	33	2.000	26.000	3
母乳終了月齢	神奈川	8.625	10.514	3.717	8	1.000	30.000	1
母乳終了月齢	青森	7.667	4.610	1.537	9	1.000	17.000	0
母乳終了月齢	千葉	8.815	5.575	1.073	27	1.000	21.000	2
母乳終了月齢	大阪	9.143	6.094	2.304	7	1.000	21.000	0
母乳終了月齢	長野	9.895	4.408	1.011	19	2.000	18.000	0
母乳終了月齢	鳥取	10.474	8.255	1.894	19	1.000	30.000	4
母乳終了月齢	奈良	12.667	11.590	6.692	3	5.000	26.000	0
母乳終了月齢	富山	11.514	6.644	1.123	35	3.000	27.000	2
母乳終了月齢	福井	13.111	8.604	1.656	27	1.000	37.000	1
母乳終了月齢	福岡	10.875	7.762	1.941	16	1.000	32.000	1
母乳終了月齢	北海道	10.125	5.903	.738	64	0.000	30.000	10

日本における離乳の地域的傾向を大まかに知るために、表7の結果を東部（北海道・青森・茨城・宮城・群馬・埼玉・山形・神奈川・千葉，306部），中部（愛知・岐阜・長野・富山・福井，302部），西部（大阪・奈良・滋賀・愛媛・岡山・鳥取・山口・福岡・熊本・佐賀・鹿児島・沖縄，311部）の3エリアに分けた。

母乳の終了した月齢には3地域間で差が見られ（ $F_{(2,836)} = 5.20, p < .01$ ），他の2地域に比べ中部地域においてより遅く終了していたことが下位検定（FisherのPLSD，以下同じ）の結果わかった（図20）。市部・郡部差については次章で論じるが，この結果が単なる地域の別による市部・郡部の比率の差の反映でないことは，地域×市郡部別の2要因分散分析によって確認された（地域の主効果： $F_{(2,831)} = 8.35, p < .0005$ ）。

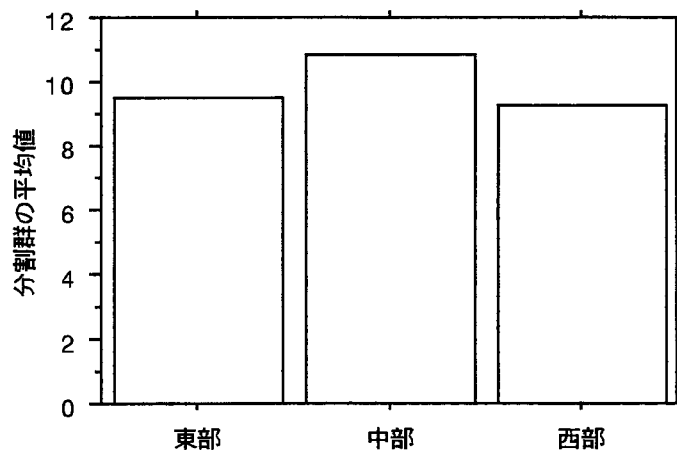


図20. 母乳終了月齢の地域比較

一方，離乳指導を保健センターなどの機関から受けたか，との問いへの回答に対しては表8のとおりであり，地域差が有意であった（ $\chi^2_{(6)} = 38.50, p < .0001$ ）。残差分析の結果，東部地域は指導をよく受けており，一方中部地域は受けない人が多く，西部地域は非常に受けたという人が少ない傾向が見られた。

表 8. 離乳指導の経験の地域差（上：回答数，下：比率）

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
東部	22	95	133	46	296
中部	7	49	161	74	291
西部	6	75	157	70	308
合計	35	219	451	190	895

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
東部	7.432	32.095	44.932	15.541	100.000
中部	2.405	16.838	55.326	25.430	100.000
西部	1.948	24.351	50.974	22.727	100.000
合計	3.911	24.469	50.391	21.229	100.000

また，その指導は役立ったか，との問いに対する回答についても地域差があり（表 9， $\chi^2_{(6)} = 20.56$ ， $p < .005$ ），残差分析の結果，東部地域が肯定的，中部地域が否定的，西部地域に強い肯定感の欠如という傾向がここでも見られた。

表 9. 指導の有効感の地域差（上：事例数，下：比率）

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
東部	28	107	80	3	218
中部	10	77	99	5	191
西部	9	92	101	4	206
合計	47	276	280	12	615

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
東部	12.844	49.083	36.697	1.376	100.000
中部	5.236	40.314	51.832	2.618	100.000
西部	4.369	44.660	49.029	1.942	100.000
合計	7.642	44.878	45.528	1.951	100.000

専門家による離乳指導に従うべきかという問いに対する回答にも地域差が有意に見られた（表 10， $\chi^2_{(6)} = 16.07$ ， $p < .05$ ）。残差分析の結果は，東部地域における賛成傾向と西部地域における賛否のアンビバレントな傾向を示していたが，中部地域においてはどの項目にも他地域に比較してとくに異なる傾向はなかった。

表10. 指導に対する従属性における地域差（上：事例数，下：比率）

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
東部	20	216	53	2	291
中部	8	201	68	4	281
西部	11	195	87	2	295
合計	39	612	208	8	867

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
東部	6.873	74.227	18.213	.687	100.000
中部	2.847	71.530	24.199	1.423	100.000
西部	3.729	66.102	29.492	.678	100.000
合計	4.498	70.588	23.991	.923	100.000

母乳以外のものを与えるきっかけとなった理由につき、その主なもののみ（母乳の出具合、子の月齢、食べ物の味への口慣らし）を選んで地域差を見たところ、その分布は有意であった（表11,  $\chi^2_{(4)} = 9.96$ ,  $p < .05$ ）。残差分析の結果、中部地域において味慣らしが多く乳の出具合が少なく、西部地域はその反対であった。この点において、東部地域には特徴がなかった。

表11. 母乳以外のものを与えた理由（上：事例数，下：比率）

	乳の出具合	子の月齢	味慣らし	合計
東部	79	75	93	247
中部	61	81	110	252
西部	93	81	85	259
合計	233	237	288	758

	乳の出具合	子の月齢	味慣らし	合計
東部	31.984	30.364	37.652	100.000
中部	24.206	32.143	43.651	100.000
西部	35.907	31.274	32.819	100.000
合計	30.739	31.266	37.995	100.000

望ましい離乳の時期についても有意差があり（表12,  $\chi^2_{(2)} = 6.22$ ,  $p < .05$ ）。

0.5), 離乳指導に肯定的であった東部地域は早期志向であったが, 西部地域と中部地域には特徴なしという結果であった。

表 1 2. 離乳の時期についての考えの地域差 (左: 事例数, 右: 比率)

	早い方がよい	遅い方がよい	合計		早い方がよい	遅い方がよい	合計
東部	178	92	270	東部	65.926	34.074	100.000
中部	162	119	281	中部	57.651	42.349	100.000
西部	161	125	286	西部	56.294	43.706	100.000
合計	501	336	837	合計	59.857	40.143	100.000

母乳をどのようにしてやめたかという問いに対する回答にも, 地域差が有意であった (表 1 3,  $\chi^2_{(4)} = 15.34$ ,  $p < .005$ ). 残差分析の結果, 中部地域に断乳派が多くそのほかが少ない, 西部地域は断乳派が少なくそのほかが多いという傾向が指摘できた. 東部地域にはこれという特徴がなかった。

表 1 3. 母乳のやめ方 (上: 事例数, 下: 比率)

	東部	中部	西部	合計
断乳	162	192	160	514
子まかせ	52	48	66	166
その他	51	32	62	145
合計	265	272	288	825

	東部	中部	西部	合計
断乳	61.132	70.588	55.556	62.303
子まかせ	19.623	17.647	22.917	20.121
その他	19.245	11.765	21.528	17.576
合計	100.000	100.000	100.000	100.000

このように日本全国の傾向を地域に分けてみると, 決して一様ではないことがわかる. その特徴は単純ではないが, 地域差はとくに指導に対する受容性に反映されていたことがわかる. 全体に肯定的であったのではあるが, 相対的に東部に肯定傾向

が強く中部に弱かった。このことが何によるのか、今後の興味ある検討課題である。

## 2. 市郡差

これまで述べてきた地域差については、事実としてそういう傾向が指摘されたものの、その差の根拠を読み込むことはできない。そこで、地域差の分析をひとまず離れ、より一般的に「市部・郡部」の差を検討してみよう。以下にその観点から有意差を得たもののうち主なものについて、項目ごとに指摘する。

市部と郡部では人工栄養の終了月齢において差があり、市部の方が有意に遅くまで人工栄養を与えていた（図21,  $F_{(1483)} = 4.11, p < .05$ ）

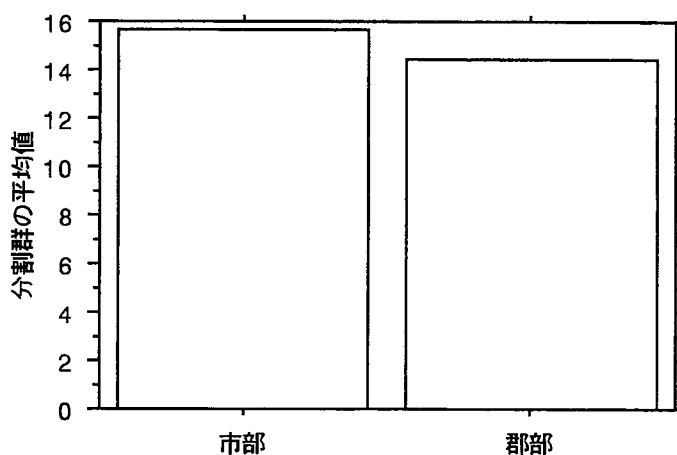


図21. 人工栄養の終了月齢の市郡部差

市部は郡部に比べ、離乳指導をまったく受けなかった人が多く、かなり受けた人という人が少なかった（表14,  $\chi^2_{(3)} = 30.03, p < .0001$ ）。



表14. 離乳指導を受けた割合の市郡部差（上：事例数，下：比率）

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
市部	14	93	246	129	482
郡部	21	126	204	60	411
合計	35	219	450	189	893

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
市部	2.905	19.295	51.037	26.763	100.000
郡部	5.109	30.657	49.635	14.599	100.000
合計	3.919	24.524	50.392	21.165	100.000

指導の有効性に対する考えも市郡部差があり（表15,  $\chi^2_{(2)} = 11.61$ ,  $p < .01$ ), 残差分析によれば指導を受けて大変役立ったという人が郡部に多く, あまり役立たなかったという人が市部に多かった. このように市部の母親は郡部の母親に比べて公的な指導への依存度が低かった.

表15. 指導の有効性についての市郡部差（上：事例数，下：比率）

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
市部	14	130	154	7	305
郡部	33	145	126	5	309
合計	47	275	280	12	614

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
市部	4.590	42.623	50.492	2.295	100.000
郡部	10.680	46.926	40.777	1.618	100.000
合計	7.655	44.788	45.603	1.954	100.000

全体を, 母乳を生後7か月未満でやめた早期終了群（平均3.68±1.78か月齢）, 13か月未満でやめた中期終了群（平均10.07±1.72か月齢）, 13か月以上続けた長期哺乳群（平均18.35±5.44か月齢）の3群に分割し, 市・郡部別の比率を調べたところ, その分布には有意な偏りがあった（表16,  $\chi^2_{(2)}$ ）

=6.31,  $p < .05$ ). 残差分析によれば, 市部に早期終了が多く, 郡部に長期哺乳が多かった. なお, 中期終了には有意な市郡部差がなかった.

表16. 母乳終了時期における市・郡部差 (上: 事例数, 下: 比率)

	早期終了	中期終了	長期哺乳	合計
市部	185	169	107	461
郡部	124	140	112	376
合計	309	309	219	837

	早期終了	中期終了	長期哺乳	合計
市部	40.130	36.659	23.210	100.000
郡部	32.979	37.234	29.787	100.000
合計	36.918	36.918	26.165	100.000

さらに, 断乳をしたと回答した母親に対し, その際乳房に何かを塗ったり絵を描いたりしたかを尋ねたところ, そういった加工を行った母親は郡部に多く, 市部に少なかった (表17,  $\chi^2_{(1)} = 7.54, p < .01$ ).

表17. 断乳の際乳房に加工した割合の市郡部差 (左: 事例数, 右: 比率)

	した	しなかった	合計		した	しなかった	合計
市部	29	109	138	市部	21.014	78.986	100.000
郡部	46	81	127	郡部	36.220	63.780	100.000
合計	75	190	265	合計	28.302	71.698	100.000

以上のように, 市部・郡部の別は離乳指導の受容度や母乳終了時期の早遅などに差をもたらしていたが, 離乳の主導性についての決定的な要因とは考えにくいものであった.

### 3. 出生順位

出生順位は, いいかえれば母親の育児経験の差であり, 離乳の考え方や実施の自律性に大きく影響する要因であり得る. とくに初産婦と経産婦の間には明瞭な差が存在

する可能性が考えられるため、ここでは子が第1子か第2子以降かに2分し、その間に差があるかどうかを検討する。

まず、離乳指導の有効性について有意な出生順位差が見られた（表18,  $\chi^2_{(3)} = 10.37, p < .05$ ）。初産婦も経産婦もともに評価は両価的だったが、残差分析の結果、初産婦において大変役立ったという回答が多く、第2子以降には一歩後退してかなり役立ったという回答が多いという出生順位差が見られた。

表18. 離乳指導の有効性に関する出生順位差（上：事例数，下：比率）

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
第1子	29	107	128	7	271
第2子以降	18	168	149	5	340
合計	47	275	277	12	611

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
第1子	10.701	39.483	47.232	2.583	100.000
第2子以降	5.294	49.412	43.824	1.471	100.000
合計	7.692	45.008	45.336	1.964	100.000

母乳哺育期間を比較すると（図22），第1子の場合は第2子以降に比べて、有意に母乳をやめた月齢が短かった（ $F_{(1836)} = 9.68, p < .005$ ）。

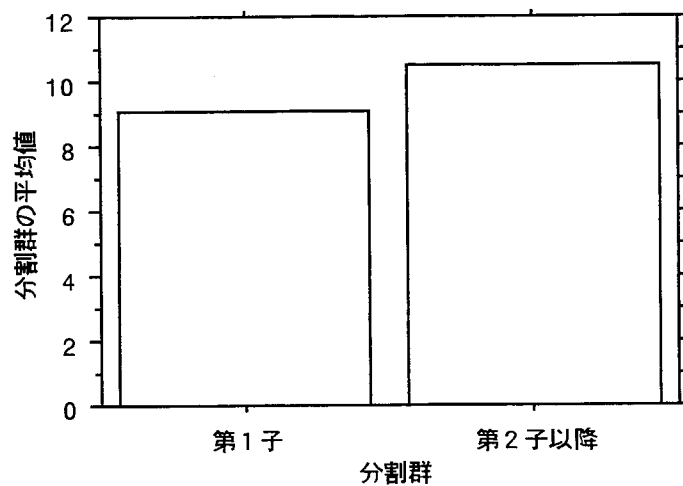


図22. 母乳終了月齢における出生順位差

出生順位によって母親の育児観の差が顕著であった。第1子の母親は、子どもの要求や個性を尊重しようと努め、子どもと自分は人間として対等であると考えているが、一方において自分の関心が子どもにばかり向けられて視野がせばまり、母親であるがために自分の行動が制約されているとも考えていることが、育児態度に関する意識を探る項目における分散分析の結果からわかり、アンビバレントな状況にあることが明らかにされた。

子育てに対する否定的感情の因子である第2因子の得点は、図23にみられる通り第1子に高いが ( $F_{(1, 863)} = 5.54, p < .05$ )、他方子どもの個性尊重因子である第3因子も第1子に高く (図24,  $F_{(1, 863)} = 11.82, p < .001$ )、初産の母親が両面的に子育てにかかわっていたことが明らかである。

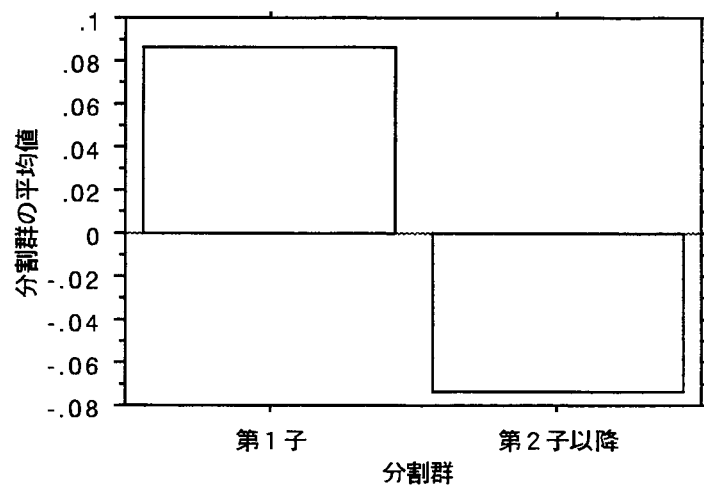


図23. 子育てに対する否定的感情因子得点における出生順位差

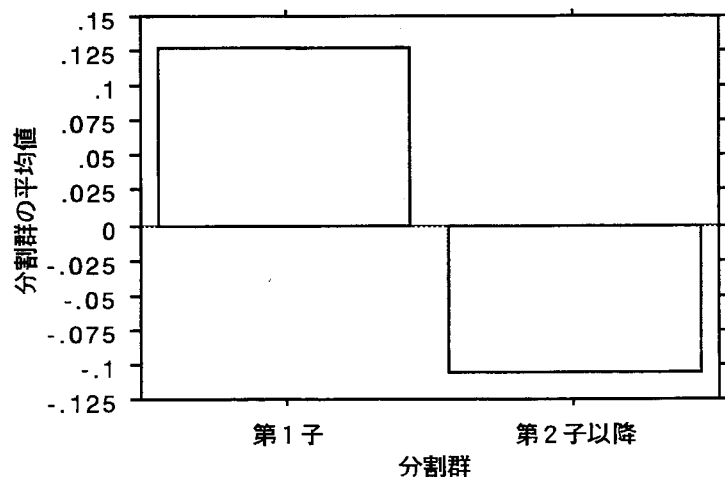


図 2.4. 子どもの個性尊重因子得点における出生順位差

そのことは、望ましい離乳時期は誰のためを考慮すべきかかを尋ねた結果にも現れている（表 1.9）。全体に子どものためと考えているが、相対的に初産の母親は自分のためだとより強く考え、経産の母親は子のためだと答えていた（ $\chi^2_{(1)} = 6.12, p < .05$ ）。

表 1.9. 離乳時期の選択は誰のためかについての出生順位差

（上：事例数，下：比率）

	子どものため	母親自身のため	合計
第1子	295	60	355
第2子以降	351	42	393
合計	646	102	748

	子どものため	母親自身のため	合計
第1子	83.099	16.901	100.000
第2子以降	89.313	10.687	100.000
合計	86.364	13.636	100.000

このように、第1子の母親は子どもに対して両価的であり、母乳哺育を自分自身のために早めに切り上げるなどの傾向がみられていた。

#### 4. 母親の就労

母親の育児行動を規定するもうひとつの大きな変数に、母親の就労があげられる。ここでは回答を母親が専業主婦か（523名、57.7%）否か（383名、42.3%）に全体を2分し、そこに差が見られるかどうかを検討する。

この差は、出生順位差と並んで、育児観の違いをもたらしていた。その質問への回答によれば、専業主婦の方が子に対し毅然とすべきだと思っており、育児中世間から取り残されていると感じ、母親としての充実感も低く、自分の関心が子どもにばかり向いていて視野が狭くなると感じたり、母親であるために行動が制約されていると感じており、母親として不適格だと思う傾向が強い。逆に仕事を持つ母親は、より子の要求を尊重し、母親になって人間的に成長したと思ひ、母親となって気持ちが安定して落ちついたと思っている。

その結果として、子育てに対する否定的感情因子（第2因子）が専業主婦に高得点となっており（図25、 $F_{(1, 852)} = 24.86, p < .0001$ ）、反対に子どもの個性尊重因子（第3因子）は就労者に高い（図26、 $F_{(1, 852)} = 7.33, p < .01$ ）。

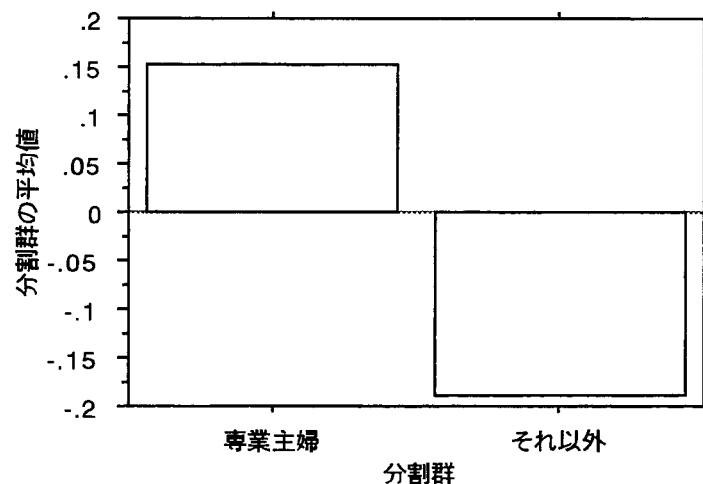


図25. 専業主婦か否かによる子育てに対する否定的感情因子の得点差

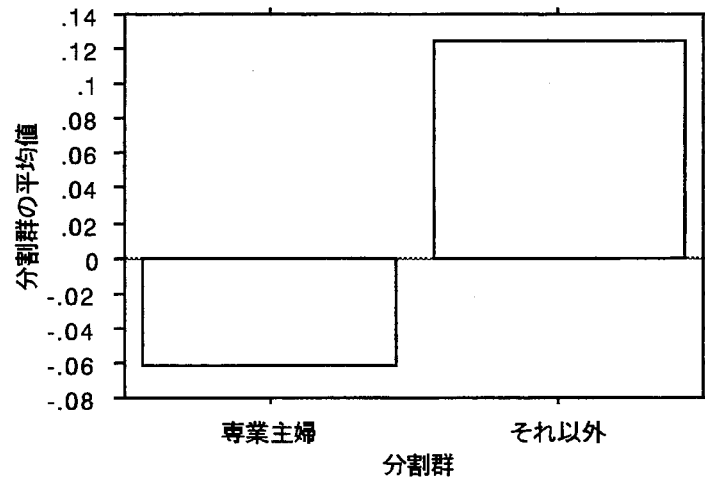


図 2 6. 専業主婦か否かによる子どもの個性尊重因子の得点差

このように、専業主婦は驚くほど顕著に子育てに対する否定的感情に支配された状態にあることがわかった。このことは、専業主婦が子育てに専念できて育児を楽しんで行っているのではないかという予想を否定する意外な結果であった。これらの傾向は第1子の母親と共通するものであり、今日の子育ての状況を考えるときに、熟考に値する重要な課題がこの結果には含まれているように思われる。

### 5. 母親の最終学歴

最終学歴で比較するために、高卒までとそれ以降とに2分した。両群の比較からは、いくつか学歴による差が見いだされた。概して学歴の高い方が肯定的なイメージを持っていることが明らかになった。

子育てが負担、子どもの前では毅然とすべき、子どもを産まない方がよかった、母親失格、といった否定的項目群には高卒までの母親が有意に高得点を示し、母親であることが好き、母親になって人間的に成長、子の要求尊重、母親であることの充実感、といった肯定的項目群にはそれより高学歴の母親達が高得点を示していた。

その結果、学歴の高い母親は否定的な育児観をもつことが少なく、高卒までの母親は否定的な育児観の因子得点が高かった（図 2 7,  $F_{(1, 859)} = 4.01, p < .05$ ）。

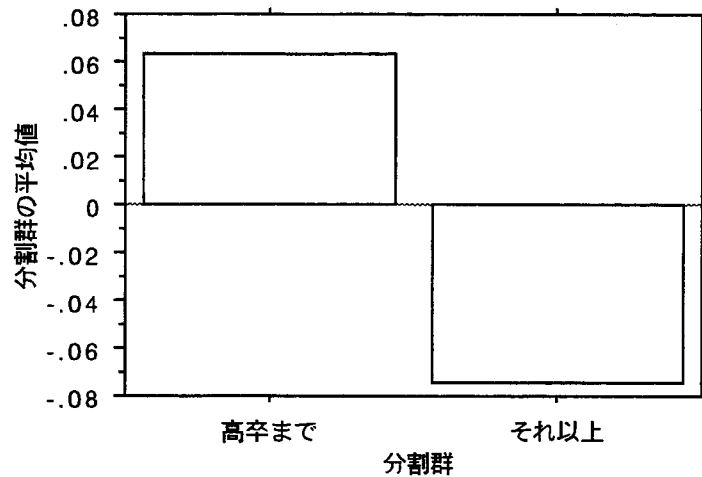


図 27. 子育てに対する否定的感情因子における学歴差

また、表 20 に見られるとおり、学歴と望ましい離乳時期にはきわめて強い対応が見られ、学歴の高い母親が遅い離乳を望ましいとしている ( $\chi^2_{(1)} = 25.68$ ,  $p < .0001$ )。

表 20. 学歴と望ましい離乳時期との相関 (上：事例数, 下：比率)

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
高卒まで	292	135	427
それ以上	205	196	401
合計	497	331	828

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
高卒まで	68.384	31.616	100.000
それ以上	51.122	48.878	100.000
合計	60.024	39.976	100.000

このように、学歴の要因は出生順位や就労の有無の要因とある程度似た傾向を示していた。それらに通底すると考えられる要素が何であるかを推測することは必ずしも容易でないが、子どものことに意識・関心が集中するような状況に陥ると、子育てが緊張をはらみ苦痛を帯びたものになり、そこから早く脱出したいと母親に思わせる要素が芽生える可能性があるのかもしれない。仮にそうであるならば、夫をはじめとする周囲の理解や支援の問題が考慮すべき重要な要素となるであろう。



### C. 離乳関連の変数相互の関連性（選択）

以下の分析は、選択肢のなかから回答の少なかった些末な項目を省くことによって主要な項目のみを抽出し、それらの相互関係から離乳とその主導性に関する大まかな傾向を指摘する。

#### 1. 母乳の終了時期との対応

WHO（1981）によれば、国や地域の違いによってさまざまな母乳哺育パターンが報告されているが、日本の国内においても母乳哺育がさまざまな時期に終了されている。この事実に注目し、母乳をやめる時期がどんな変数によって規定されているかの検討を行う。さきに表15で行ったように「早期終了（7か月齢未満，310名）」「中期終了（13か月齢未満，311名）」「長期哺乳（13か月齢以上，221名）」の3群に分類して比較した。

母乳以外を与え始めた最大の理由において、3群は異なっていた（ $\chi^2_{(4)} = 3119.27, p < .0001$ ）。乳の出具合、子の月齢、味慣らしの3大理由に絞って分析したところ、まず早期終了群は乳の出具合が大きな理由であり、一方長期哺乳者は味慣らしが最大の理由であった（表21）。また中期終了者はどちらかといえば長期哺乳者に近かった。このように、とくに早期終了者が不本意に哺乳を終了せざるを得なかったという不全感をかかえている可能性が示唆された。

表21. 母乳以外を与え始めた理由の母乳終了時期による比較  
(上：事例数，下：比率)

	乳の出具合	子の月齢	味慣らし	合計
早期終了	139	51	64	254
中期終了	57	96	115	268
長期哺乳	18	70	96	184
合計	214	217	275	706

	乳の出具合	子の月齢	味慣らし	合計
早期終了	54.724	20.079	25.197	100.000
中期終了	21.269	35.821	42.910	100.000
長期哺乳	9.783	38.043	52.174	100.000
合計	30.312	30.737	38.952	100.000

離乳を完了した最大の理由においても、早期終了群は母乳の出具合を多くあげ、中期終了群は子の母乳離れを、長期哺乳群は子の月齢を、それぞれ相対的に多くあげていた（表22,  $\chi^2_{(6)} = 71.56, p < .0001$ ）。

表22. 離乳完了の理由の母乳終了時期による比較（上：事例数，下：比率）

	母乳の出具合	子の月齢	子の母乳離れ	子の食べ具合	合計
早期終了	104	80	18	28	230
中期終了	47	102	44	16	209
長期哺乳	15	88	26	16	145
合計	166	270	88	60	584

	母乳の出具合	子の月齢	子の母乳離れ	子の食べ具合	合計
早期終了	45.217	34.783	7.826	12.174	100.000
中期終了	22.488	48.804	21.053	7.656	100.000
長期哺乳	10.345	60.690	17.931	11.034	100.000
合計	28.425	46.233	15.068	10.274	100.000

母乳をやめるときに親が時期を決めて断乳したか、断乳せずに子どもに任せたかを尋ねたところ、早期終了者に断乳の割合が低くその他の割合が高いのに対し、他の2群には断乳の割合が高い、という結果が得られた（表23,  $\chi^2_{(4)} = 120.43, p < .0001$ ）。このことは、早期終了群が母乳の出の悪さを理由としていることと対応するものであると考えられる。

表23. 母乳のやめ方と終了時期との対応（上：事例数，下：比率）

	断乳	子まかせ	その他	合計
早期終了	118	54	102	274
中期終了	212	58	30	300
長期哺乳	168	42	8	218
合計	498	154	140	792

	断乳	子まかせ	その他	合計
早期終了	43.066	19.708	37.226	100.000
中期終了	70.667	19.333	10.000	100.000
長期哺乳	77.064	19.266	3.670	100.000
合計	62.879	19.444	17.677	100.000

早期終了群・中期終了群・長期哺乳群の3群間で比較したところ、早期終了群は人工栄養の使用が有意に多く、一方長期哺乳群はその不使用が有意に多いというコントラストがあったが（表24,  $\chi^2_{(2)} = 247.62$ ,  $p < .0001$ ），このことも当然のことと思われる。

表24. 母乳終了時期による人工栄養使用の有無（左：事例数，右：比率）

	はい	いいえ	合計		はい	いいえ	合計
早期終了	299	9	308	早期終了	97.078	2.922	100.000
中期終了	209	96	305	中期終了	68.525	31.475	100.000
長期哺乳	70	143	213	長期哺乳	32.864	67.136	100.000
合計	578	248	826	合計	69.976	30.024	100.000

乳が出にくい場合には、母親はより早く離乳食を与えようとするのが予想されるが、図28によれば実際にその通りであった（ $F_{(2, 794)} = 3.28$ ,  $p < .05$ ）。下位検定の結果、早期終了者と長期哺乳者間で差が優位であった。

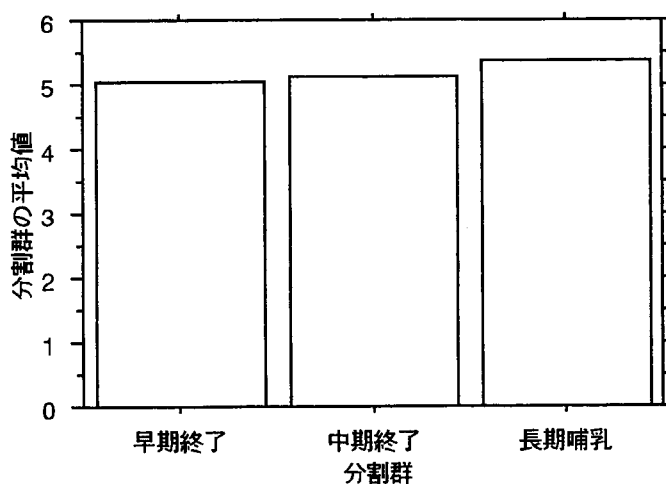


図28. 母乳終了月齢と離乳食開始月齢の対応

また、離乳の時期については、早期・中期終了者は早い方がよいと考えていたが、長期哺乳者は遅い方がよいという考えを強くもっていて、その点で長期哺乳者は特異

であった (表 25,  $\chi^2_{(2)} = 13.21, p < .005$ ).

表 25. 母乳終了時期による離乳の理想的時期の比較 (上: 事例数, 下: 比率)

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
早期終了	178	107	285
中期終了	177	105	282
長期哺乳	99	107	206
合計	454	319	773

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
早期終了	62.456	37.544	100.000
中期終了	62.766	37.234	100.000
長期哺乳	48.058	51.942	100.000
合計	58.732	41.268	100.000

母乳終了のしかたを子のために選択するか母親自身のためかという問いへの回答からは, 相対的に早期終了者が母親のためと考え, 長期哺乳者が子のためと考えているという有意な対比が明らかにされた (表 26,  $\chi^2_{(2)} = 9.70, p < .01$ ).

表 26. 母乳終了時期と離乳方法の選択基準の対応 (上: 事例数, 下: 比率)

	子どものため	母親自身のため	合計
早期終了	99	41	140
中期終了	179	51	230
長期哺乳	154	27	181
合計	432	119	551

	子どものため	母親自身のため	合計
早期終了	70.714	29.286	100.000
中期終了	77.826	22.174	100.000
長期哺乳	85.083	14.917	100.000
合計	78.403	21.597	100.000

母乳をやめるときの感想を肯定的か (ほっとした安堵感, うれしさ, やったという達成感) 否定的か (悲しみ, むなしさ) で 2 分し, 母乳の早期終了群・中期終了群・長期哺乳群の 3 群間で比較したところ, 中期終了群と長期哺乳群が肯定的であったの

に比して、早期終了群のみが否定的な感想を相対的に強く抱いているという対比が明瞭にみられた（表27,  $\chi^2_{(2)} = 50.33, p < .0001$ ）。

表27. 母乳終了時期と母乳終了時の感想の対応（上：事例数，下：比率）

	肯定的	否定的	合計
早期終了	62	62	124
中期終了	150	33	183
長期哺乳	124	24	148
合計	336	119	455

	肯定的	否定的	合計
早期終了	50.000	50.000	100.000
中期終了	81.967	18.033	100.000
長期哺乳	83.784	16.216	100.000
合計	73.846	26.154	100.000

早期離乳者は、育児観を尋ねる質問に対し、母親であることが好き、母親である充実感、母親になって安定し落ちついた、という項目で得点が有意に低く、自分は母親として不適格であるという項目で有意に高得点であるなど、自己イメージの相対的に低い母親である傾向が有意に強かった。その結果、肯定的母性感情因子（第1因子）が他の2群に比べて早期離乳群に低いという傾向が有意であった（図29,  $F_{(2, 79)} = 3.60, p < .05$ ）。

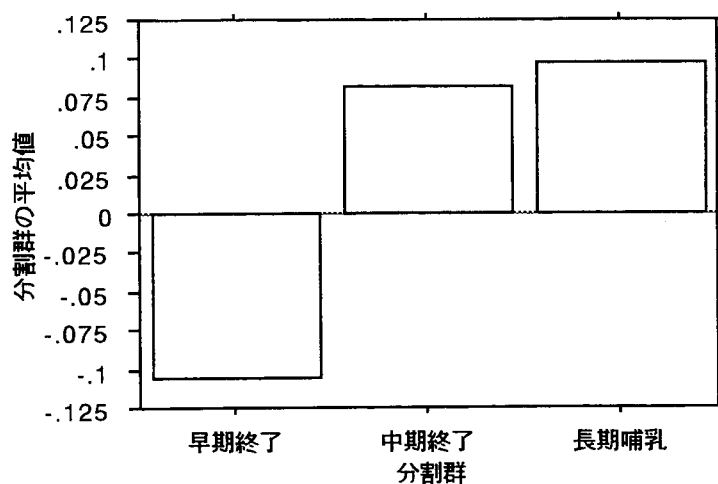


図29. 母乳終了時期による肯定的母性感情因子得点の比較

これらの結果は、早期終了者が単に母体の事情から、やむを得ず母乳哺育の終了を早めたというばかりでは説明できない。むしろ、母親としての自分や子育てへの肯定的志向性の低さがその背景にあり、それが母乳で子育てを行う意志や努力を低めたということも否定できない要素として指摘できよう。それに対して長期哺乳者は、母乳が出てしかも母親が長く哺乳することを積極的に選択した者達であることがわかる。

## 2. 断乳か子まかせか

本研究の主眼は、離乳における親と子の主導性の検討にある。その意味において、その際断乳を行ったか子にまかせたかは、重要な検討事項であると考えられる。離乳の手段として断乳を選んだ人達は、子の月齢をその最大の理由としてあげる人が圧倒的に多かった（表28,  $\chi^2_{(3)} = 33.63, p < .0001$ ）。

表28. 離乳のしかたによる離乳方法の選択理由（上：事例数，下：比率）

	母乳の出具合	子の月齢	子の母乳離れ	子の食べ具合	合計
断乳	79	195	45	32	351
子まかせ	36	33	37	11	117
合計	115	228	82	43	468

	母乳の出具合	子の月齢	子の母乳離れ	子の食べ具合	合計
断乳	22.507	55.556	12.821	9.117	100.000
子まかせ	30.769	28.205	31.624	9.402	100.000
合計	24.573	48.718	17.521	9.188	100.000

離乳時期は早い方がよいという母親が断乳群にはより多く、子まかせ群には遅い方がよいという回答が対応していた（表29,  $\chi^2_{(1)} = 4.89, p < .05$ ）。

表 29. 離乳のしかたによる理想の離乳時期の比較（上：事例数，下：比率）

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
断乳	291	183	474
子まかせ	79	75	154
合計	370	258	628

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
断乳	61.392	38.608	100.000
子まかせ	51.299	48.701	100.000
合計	58.917	41.083	100.000

その差は、離乳方法やスケジュールを決めた根拠として、子まかせ派が子どもの様子を多くあげていたのに対し、断乳派は子以外の要因を選んでいった（表 30,  $\chi^2_{(3)} = 31.66, p < .0001$ ）。

表 30. 離乳のしかたによるその根拠の比較（上：事例数，下：比率）

	親・知人	専門家	自分の考え	子の様子	合計
断乳	58	176	129	120	483
子まかせ	17	41	23	75	156
合計	75	217	152	195	639

	親・知人	専門家	自分の考え	子の様子	合計
断乳	12.008	36.439	26.708	24.845	100.000
子まかせ	10.897	26.282	14.744	48.077	100.000
合計	11.737	33.959	23.787	30.516	100.000

母乳終了の際の方法を誰のために選択したかに対する回答として、両群ともに子どものためという母親が多かったが、断乳群には有意に母親自身のためという回答が相対的に多く（表 31,  $\chi^2_{(1)} = 9.75, p < .005$ ），そのことは今述べた離乳のしかたの判断源の偏りの特徴とあい通ずるものであった。

表31. 離乳のしかたによる母乳終了の方法選択の根拠 (上: 事例数, 下: 比率)

	子どものため	母親自身のため	合計
断乳	297	92	389
子まかせ	99	11	110
合計	396	103	499

	子どものため	母親自身のため	合計
断乳	76.350	23.650	100.000
子まかせ	90.000	10.000	100.000
合計	79.359	20.641	100.000

断乳群は、育児観をたずねる個別の項目として、子の幸不幸が親の責任と考え、逆に子の個性を尊重することや母親としているときに自分らしいと考えたりすることが少なく、子の個性尊重因子（第3因子）の得点が有意に低かった（図30,  $F_{(1, 639)} = 4.33, p < .05$ ）。

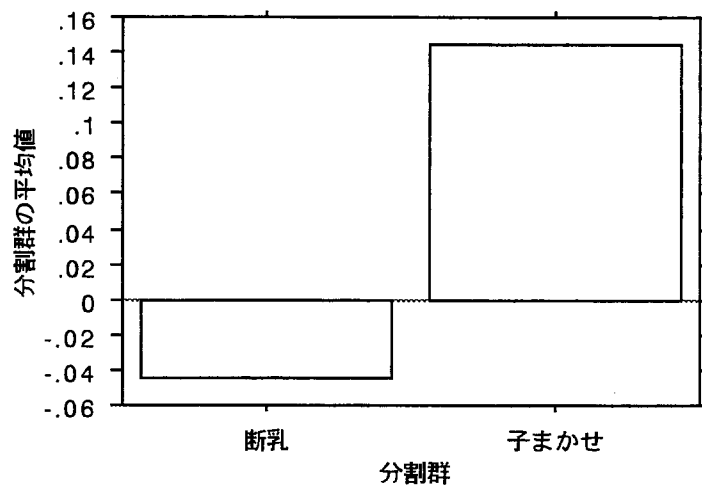


図30. 離乳のしかたによる子どもの個性尊重因子得点の比較

専門家による離乳指導が役立ったかを尋ねた問いに対して、断乳群は子まかせ群に比べて、まったく役立たなかったとする回答者が有意に少なく（表32,  $\chi^2_{(3)} = 11.06, p < .05$ ）、また指導には従うべきだという考えがより強い（表33,  $\chi^2_{(3)} = 17.96, p < .005$ ）という結果であった。このように、断乳を選んだ母親達は、離乳の際に子どもの主体性に立脚するよりも、母親や専門家の方に根拠をおく傾向のより強い人達であったといえよう。



表 3 2. 離乳のしかたによる離乳指導の評価 (上: 事例数, 下: 比率)

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
断乳	28	151	163	3	345
子まかせ	10	45	60	7	122
合計	38	196	223	10	467

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
断乳	8.116	43.768	47.246	.870	100.000
子まかせ	8.197	36.885	49.180	5.738	100.000
合計	8.137	41.970	47.752	2.141	100.000

表 3 3. 離乳のしかたによる離乳指導の受容 (上: 事例数, 下: 比率)

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
断乳	23	358	109	1	491
子まかせ	6	102	46	6	160
合計	29	460	155	7	651

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
断乳	4.684	72.912	22.200	.204	100.000
子まかせ	3.750	63.750	28.750	3.750	100.000
合計	4.455	70.661	23.810	1.075	100.000

断乳か否かに関連して、離乳時の月齢との対応をさらに詳しく調べたところ、以下のような事柄が明らかにされた。

母乳をやめたのは自分のためというよりも子どものためという回答が多かったが、実際にやめることを主導したのは母親であることが多かった。その傾向は8か月齢を過ぎて一層顕著であった(図3 1)。そして、その理由としては、初期には母乳の不足が、8か月以降は子の月齢が、それぞれ大きなものであった。このように子どもの年齢が進むと、母親主導性が強まる傾向があった(図3 2)。さらに、母親が主導するタイプの離乳では、その根拠に「子どもの年齢」をあげる母親が多かった。

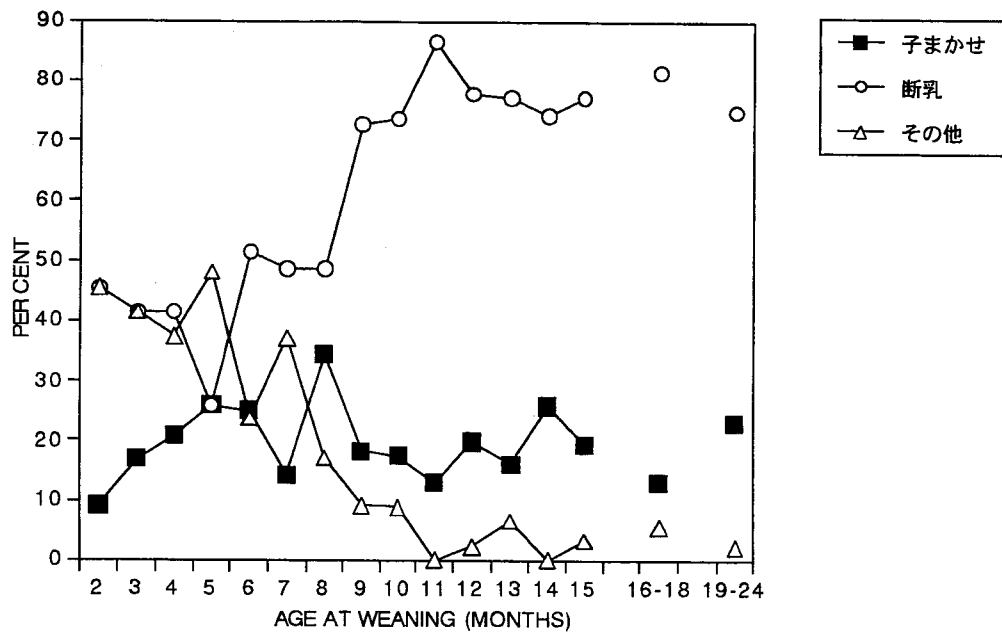


図 3 1. どのようにして母乳を離乳したか

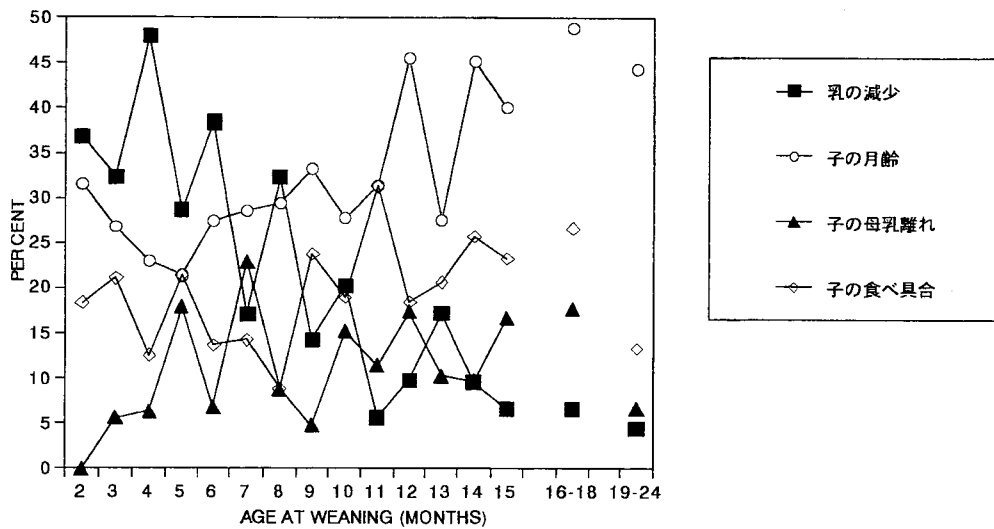


図 3 2. 離乳の理由

ここで重要なことは、厚生省による離乳指導の存在であると思われる。この調査への協力者の大半が離乳を実施した1994～1995年当時は、「離乳は1歳までに完了すること」というガイドラインがあった。このガイドラインは地域の保健センターに通達され、「通常1歳までには離乳」という指導が保健婦等によってなされる根拠となっていた。母親はこういった指導などに大きく影響されて離乳の方針をたて、

1歳までに離乳を完了する結果となったのであろう。

母親が離乳を完了する際に参考にしたものとして特筆すべきは、1歳過ぎの時点で医療的エキスパートが高い位置にあるという点であろう。専門家の指導を受け入れて1歳までに離乳を完了しようとする母親の姿が浮かび上がる。ただし、最後の時期においては、子の主体性に再び委ねられることとなる（図33）。

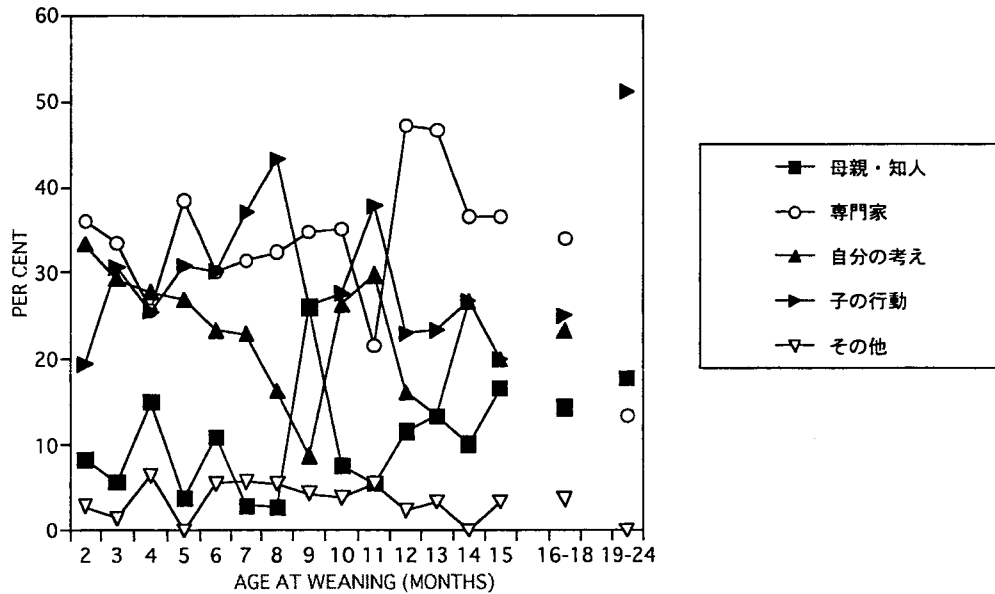


図33. 離乳に関する情報源

母親主導で離乳を行った場合、完了に続く感想として、安心感、やったという達成感を強く感じていたが、このことも厚生省・専門家の指導の影響が反映されたことであるといえるであろう。

母親主導の離乳にはいくつかの典型的な手法があり、そのうちのいくつかには乳房に何らかの加工をするという手法が含まれていた。特に1歳を過ぎてから乳房に絵を描くということがしばしばなされていた（図34）。その典型的なものが「桶谷式断乳」である。

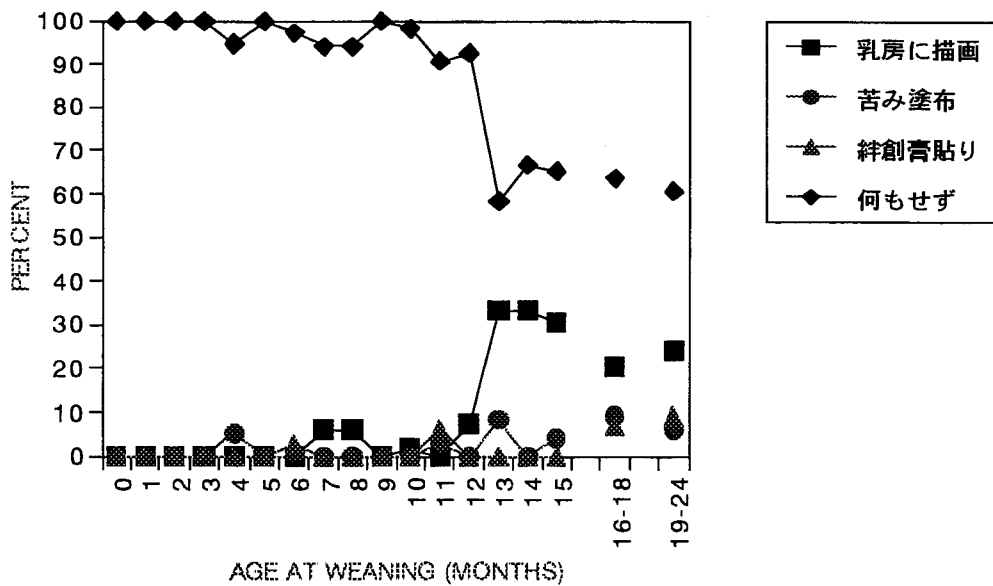


図34. 乳房への加工

### 3. 人工栄養使用の有無

母乳終了が早いと人工栄養を導入する傾向が強いということをさきに述べたが、その理由として人工栄養導入群は乳の出具合の悪さを有意に多くあげていた（表34,  $\chi^2_{(2)} = 72.76, p < .0001$ ）。

表34. 人工栄養使用の有無と母乳以外の導入の理由の対応（上：事例数，下：比率）

	乳の出具合	子の月齢	味慣らし	合計
はい	213	152	168	533
いいえ	19	81	117	217
合計	232	233	285	750

	乳の出具合	子の月齢	味慣らし	合計
はい	39.962	28.518	31.520	100.000
いいえ	8.756	37.327	53.917	100.000
合計	30.933	31.067	38.000	100.000

しかし、それにもかかわらず、人工栄養導入者は母親自身のために母乳を終了し、

非使用者は子どものために終了するという対応がみられた（表35,  $\chi^2_{(1)} = 7.78$ ,  $p < .01$ ）。

表35. 人工栄養使用の有無と母乳終了の理由の対応（上：事例数, 下：比率）

	子どものため	母親自身のため	合計
はい	266	91	357
いいえ	171	31	202
合計	437	122	559

	子どものため	母親自身のため	合計
はい	74.510	25.490	100.000
いいえ	84.653	15.347	100.000
合計	78.175	21.825	100.000

母乳完了時の感想としては、人工栄養使用者は否定的、非使用者は肯定的であった（表36,  $\chi^2_{(1)} = 11.91$ ,  $p < .001$ ）。

表36. 人工栄養使用の有無と母乳完了の感想の対応（左：事例数, 右：比率）

	肯定的	否定的	合計		肯定的	否定的	合計
はい	198	94	292	はい	67.808	32.192	100.000
いいえ	138	29	167	いいえ	82.635	17.365	100.000
合計	336	123	459	合計	73.203	26.797	100.000

人工栄養の使用者は、母乳の出具合の悪さによって離乳せざるを得なかったものに有意に多かったが（表37,  $\chi^2_{(3)} = 26.43$ ,  $p < .0001$ ），それにもかかわらず離乳は早い方がよいと考えているものが高率にみられた（表38,  $\chi^2_{(1)} = 10.37$ ,  $p < .005$ ）。

表 3 7. 人工栄養使用の有無と母乳終了の原因の対応 (上: 事例数, 下: 比率)

	母乳の出具合	子の月齢	子の母乳離れ	子の食べ具合	合計
はい	151	196	57	52	456
いいえ	23	93	35	18	169
合計	174	289	92	70	625

	母乳の出具合	子の月齢	子の母乳離れ	子の食べ具合	合計
はい	33.114	42.982	12.500	11.404	100.000
いいえ	13.609	55.030	20.710	10.651	100.000
合計	27.840	46.240	14.720	11.200	100.000

表 3 8. 人工栄養使用の有無と理想の離乳時期の対応 (上: 事例数, 下: 比率)

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
はい	375	218	593
いいえ	120	115	235
合計	495	333	828

	早い方がよい	遅い方がよい	合計
はい	63.238	36.762	100.000
いいえ	51.064	48.936	100.000
合計	59.783	40.217	100.000

育児観に対する質問項目への回答では、母親であることが好きだ、あるいは母親であることに充実感を感じる、母親であることに生きがいを感じる、という回答への肯定観が有意に少なく、逆に自分が母親として不適格だ、母親であるために自分の行動が制限されている、とより強く感じるなど、母親であることの肯定感の低い人が人工栄養を使う傾向があった。そのような傾向の総合されたものとして、因子分析の結果、肯定感因子である第 1 因子得点が有意に低かった (図 3 5,  $F_{(1, 851)} = 8.21, p < .005$ )。

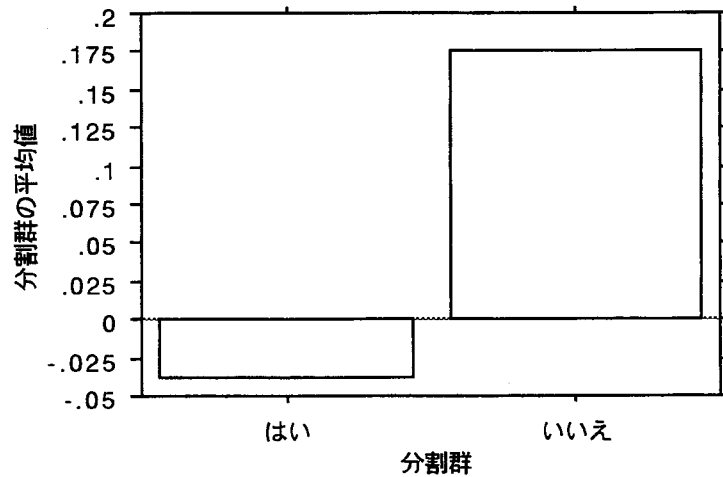


図35. 人工栄養使用の有無による肯定的母性感情因子得点の差

#### 4. 母乳終了の方法は子のためか自分のためか

主導性の存在を確認する上で、離乳の方法を誰のために選んだかという問いに対する回答は、大きな情報源になる。その回答のうち、子どものためを考えて選んだという者と母親自身のためという者だけを抽出して分析を行った。

離乳の方法は子どものためを考えて選んだという母親は、母乳終了の時期が遅くなる傾向にあることはすでに指摘したが、その母親達は同時に母親であることが好きで、母親であることに充実感や生きがいを感じており、子育ての負担を感じることや、育児中世間から取り残されているという感じが少なく、母親としているときがもっとも自分らしいと感じ、母親としての不適格感も低いなど、育児観を尋ねる質問項目の多くに一貫して母親でいることの肯定観を示す者達であった。そしてそのことは、因子分析の結果にも反映されていて、肯定的母性感情因子（第1因子）得点が有意に高かった（図36,  $F_{(1, 534)} = 10.69, p < .005$ ）。

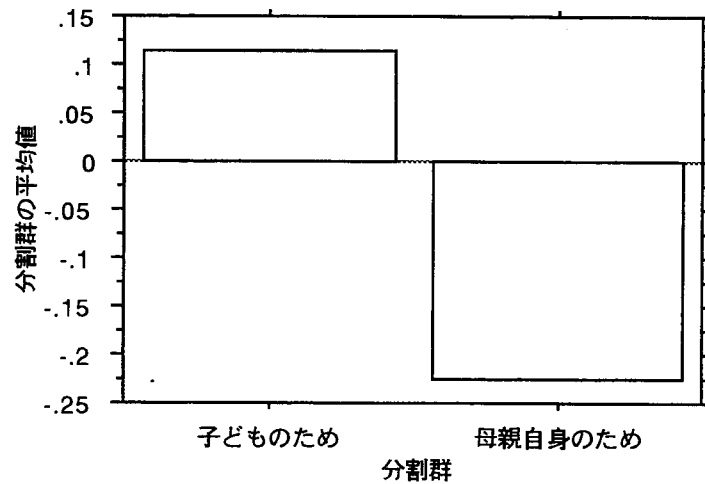


図36. 母乳終了の方法選択が子のためか自分のためかによる肯定的母性感情因子得点の差

### 5. 離乳の早遅への考え方

離乳時期は早い方がいいか遅い方がいいか、という問いも離乳の主導性と大いにかかわる質問である。実際に行われた母乳終了時期がその差と対応していたことをすでに指摘したが、早い離乳をよしとする母親は、子どもの前で毅然とすべきである、子どもを産まない方がよかった、子どもの幸・不幸は自分の責任による、厳しいしつけが親の愛情である、と考える傾向が強く、逆に子どもは人間として自分と対等だと考える傾向が低かった。

早い離乳を好む母親はまた、母親自身のためにそう考える傾向がより強く、反対に遅い方がよいと考える母親は子どものためにそう考える者が多かった（表39,  $\chi^2(1) = 19.28, p < .0001$ ）。



表39. 望ましい離乳の時期とそれが誰のためかの対応 (上: 事例数, 下: 比率)

	子どものため	母親自身のため	合計
早い方がよい	367	82	449
遅い方がよい	271	20	291
合計	638	102	740

	子どものため	母親自身のため	合計
早い方がよい	81.737	18.263	100.000
遅い方がよい	93.127	6.873	100.000
合計	86.216	13.784	100.000

早い離乳をよいとする母親は、同時に、専門家の離乳指導を非常に受けたかまったく受けなかったかの両極において遅い方がよいとする母親よりも若干多かった (表40,  $\chi^2_{(3)} = 8.35, p < .05$ )。そして、そのような指導に対して賛意を示す者の相対的に多いことも特徴的であった (表41,  $\chi^2_{(3)} = 16.94, p < .005$ )。

表40. 望ましい離乳時期と離乳指導を受けた頻度の対応  
(上: 事例数, 下: 比率)

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
早い方がよい	25	117	231	118	491
遅い方がよい	8	84	180	62	334
合計	33	201	411	180	825

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
早い方がよい	5.092	23.829	47.047	24.033	100.000
遅い方がよい	2.395	25.150	53.892	18.563	100.000
合計	4.000	24.364	49.818	21.818	100.000

表4 1. 望ましい離乳時期と離乳指導への賛意の対応（上：事例数，下：比率）

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
早い方がよい	24	354	95	1	474
遅い方がよい	13	214	99	6	332
合計	37	568	194	7	806

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
早い方がよい	5.063	74.684	20.042	.211	100.000
遅い方がよい	3.916	64.458	29.819	1.807	100.000
合計	4.591	70.471	24.069	.868	100.000

### 6. 離乳時期は子のために決めるか自分のためか

離乳時期を子どものためを思って決めようとする母親は、母親であることが好きで、母親であることの充実感を感じ、母親になって気持が安定し、母親であることに生きがいを感じる傾向が強い一方、母親自身のためと思う母親は、子育てが負担で、育児中世間から取り残され、子を産まない方がよかったと感じ、母親であるために行動の被制約感をもつ傾向が強かった。このことは肯定的母性感情因子の得点（図3 7,  $F_{(1, 715)} = 9.14, p < .005$ ）と子育てに対する否定的感情因子の得点（図3 8,  $F_{(1, 715)} = 8.17, p < .005$ ）の両方に反映されていた。

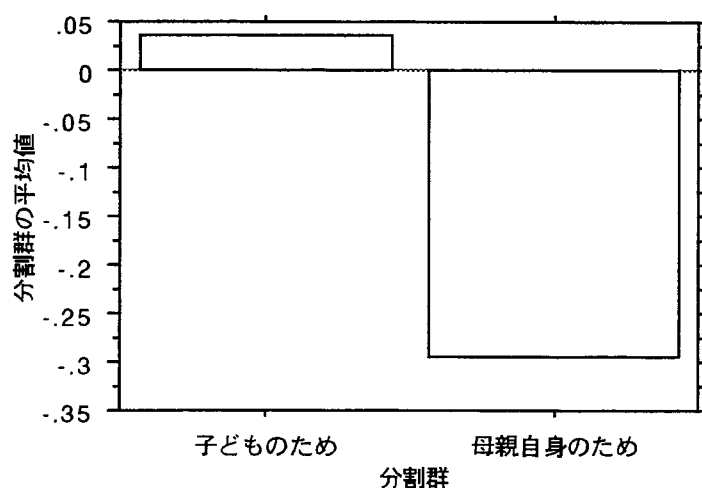


図3 7. 離乳時期を誰のために決めるかによる肯定的母性感情因子得点の差

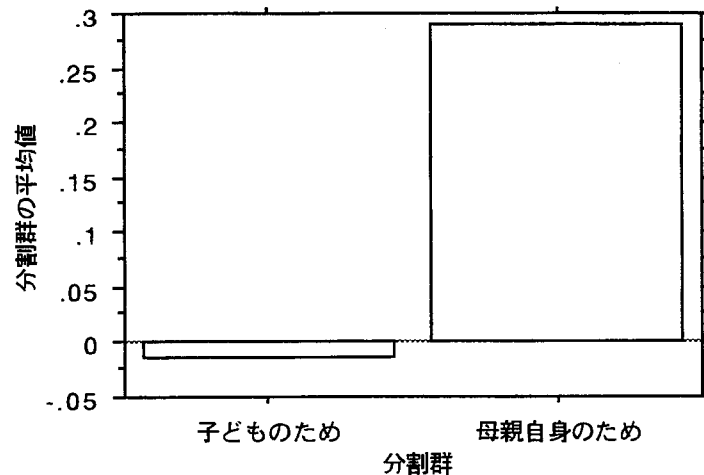


図38. 離乳時期を誰のために決めるかによる子育てに対する  
否定的感情因子得点の差

#### 7. 離乳方法・スケジュール決定の根拠

離乳方法やスケジュールの決定の参考にしたものとして、親・知人、専門家、自分の考え、子の様子のみを抽出し、その間の比較をした。

子育てが負担である、子を産まない方がよかった、という感想に有意な群間差があり、下位検定の結果いずれも「専門家」群>「子の様子」群であった。逆に母親になって気持ちが安定して落ちついたという感想は「子の様子」群>「専門家」群であった。

育児中世間から取り残されている、自分は母親として不資格だ、自分の関心は子どもばかりで視野が狭くなる、という回答は「子の様子」群に有意に低く、それはとくに「親・知人」「専門家」との間において一貫して有意な結果であった。

そのような傾向の総合されたものとして、各群の子育てに対する否定的感情因子得点が図39のようにみられ、この差は有意であった ( $F_{(3, 78.5)} = 5.45$ ,  $p = .001$ )。下位検定の結果、子の様子にもとづくとする群が他の3群よりも有意に低い傾向を示していた。

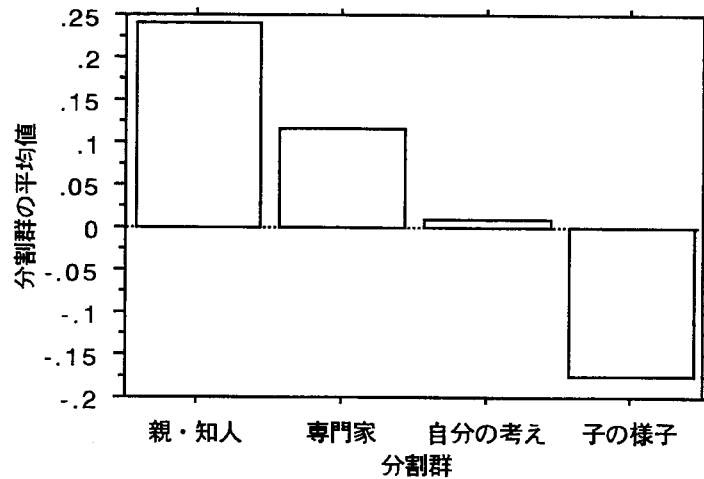


図 39. 離乳方法決定の根拠による子育てに対する否定的感情因子得点の差

専門家の情報に依存する母親が専門家の離乳指導を相対的によく受けたことは当然として、親・知人やさらに自分の考えにもとづく者は専門家の指導を受けない傾向が有意であった（表 4 2,  $\chi^2_{(9)} = 60.33$ ,  $p < .0001$ ）。子の様子にもとづく母親には、他の母親に比較して特異な傾向はなかった。まったく同様の結果は、指導が役立ったかという質問に対する回答でも指摘できた（表 4 3,  $\chi^2_{(9)} = 41.48$ ,  $p < .0001$ ）。

表 4 2. 離乳方法決定の根拠による離乳指導の受け方の差（上：事例数，下：比率）

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
親・知人	3	17	54	15	89
専門家	16	101	136	28	281
自分の考え	5	29	105	66	205
子の様子	8	61	122	54	245
合計	32	208	417	163	820

	非常に受けた	かなり受けた	あまり受けなかった	まったく受けなかった	合計
親・知人	3.371	19.101	60.674	16.854	100.000
専門家	5.694	35.943	48.399	9.964	100.000
自分の考え	2.439	14.146	51.220	32.195	100.000
子の様子	3.265	24.898	49.796	22.041	100.000
合計	3.902	25.366	50.854	19.878	100.000

表43. 離乳方法決定の根拠による離乳指導への評価の差（上：事例数，下：比率）

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
親・知人	1	23	37	1	62
専門家	26	128	75	1	230
自分の考え	6	36	69	3	114
子の様子	10	73	84	5	172
合計	43	260	265	10	578

	大変役だった	かなり役だった	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった	合計
親・知人	1.613	37.097	59.677	1.613	100.000
専門家	11.304	55.652	32.609	.435	100.000
自分の考え	5.263	31.579	60.526	2.632	100.000
子の様子	5.814	42.442	48.837	2.907	100.000
合計	7.439	44.983	45.848	1.730	100.000

一方、専門家の指導に従うべきかという質問に対しては、「自分の考え」群に加えて「子の様子」群が強く反対の意向を示していることが特筆される（表44， $\chi^2_{(9)} = 53.26$ ， $p < .0001$ ）。

表44. 離乳方法決定の根拠による離乳指導への賛意（上：事例数，下：比率）

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
親・知人	4	65	17	0	86
専門家	17	226	33	0	276
自分の考え	3	130	61	3	197
子の様子	10	144	81	5	240
合計	34	565	192	8	799

	非常に賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	非常に反対	合計
親・知人	4.651	75.581	19.767	0.000	100.000
専門家	6.159	81.884	11.957	0.000	100.000
自分の考え	1.523	65.990	30.964	1.523	100.000
子の様子	4.167	60.000	33.750	2.083	100.000
合計	4.255	70.713	24.030	1.001	100.000

## 総括

日本全国から3歳児健診を通じて集められた923部の回答をもとに、日本で行われている離乳のスタイルが分析された。以下に、本研究課題である親子間の主導性に関わる部分に焦点化してまとめを行う。

1. 母乳が理想的な食物であるという認識は母親において明確であった。
2. 離乳はその多くが1歳までになされていた。それは厚生省の指導による影響が大きいと考えられた。
3. 一方、離乳食は生後半年頃に導入されていた。
4. 母乳以外のものを与えるようになった理由は、乳の減少、子の月齢、固形食への慣らし、という3点がその主なものであった。
5. 母乳の終了は母親の意思によって実行されることが多く、それは子どものためを思ってというのが主たる理由であり、その決断は子の月齢に基づいてなされていた。
6. 離乳の指導という点に関しては、あまり受けなかったとする母親が多く、また受けた場合のその評価も肯定否定が半ばしていた。
7. 専門家の離乳指導に従うべきかどうかについては、「どちらかといえばそう思う」という回答がおおく、母親全体としてはそういった指導に意味を認めつつもアンビバレントな姿勢であったといえる。
8. 母親の育児観は、肯定的な母性感情、子育てに対する否定感情、子の個性尊重、という3つの因子から構成されていた。
9. 指導を受けたという人は郡部に相対的に多く、また役だったという評価も郡部に多いなど、市部に比べて郡部がより肯定的に評価していた。また、郡部の方が母乳を長期にわたって与えていた。
10. 出生順位という側面からは、第1子において母乳期間が短く、かつ子育てへの否定的感情が強かった。同時に子どもの個性を尊重するという気持ちも強いが、一方で離乳時期を自分のために決めようとする傾向も強かった。初産の母親の本音と建て前との間にゆれる心境の現れとも考えられる。
11. 専業主婦は、子育てに対して否定的感情をもつ傾向がきわめて強く、実際の子育

ての状況下においては、初産の母親がかかえる問題と共通する問題が指摘できるように思われる。

12. 学歴という要因も、母親の育児観・育児行動を強く規定しており、高学歴の母親の方が育児を肯定的に受けとめ、長く哺乳すべきだと考えていた。おそらく就業の有無と学歴は相互に関連する変数であろう。
13. 母乳を早期に終了したケースは、母乳不足が大きな要因であり、結果として人工栄養を補う場合が多く、母親の育児に対する否定的感情が強かった。一方長期間母乳を与え続けた母親は、離乳は遅い方がよく、それは子どものためと考えていた。
14. 断乳は子の月齢を規準になされることが多く、かつ早期の離乳が望ましいとする母親が多かった。そして断乳群には、離乳方法の選択は母親自身のためにしたという回答が相対的に多く、また子どもの個性尊重に対する考え方が消極的であった。さらに断乳をした母親・早い離乳がいいと考える母親は専門家の指導に対する評価が高く、そのことは厚生省の通達にある1歳時点での離乳という指導の影響を、これらの母親がより強く受けていると推測させるものであった。
15. 人工栄養の使用は、母乳の不足と対応していたが、同時にそれは離乳時期が早い方がよいとする考え方や育児に対する肯定的感情の低さとも対応していた。このことは、人工栄養の導入が単なる母親の体調の結果としてだけでなく、暗に母親の育児観をも反映した選択である可能性を示唆している。
16. 母乳終了方法の選択が子どものためというよりも母親自身のためと考える母親や、離乳時期を子どもよりも自分自身のために決めるとする母親は、母性感情がより否定的で、また早い離乳を好む母親は自分自身のためにそう考える傾向が強かった。
17. 子どもの様子に依拠して離乳のし方を決定しようとする母親には、子育てに対する否定的感情が低く、またその母親は、自分の考えに基づいて離乳の仕方を選択した母親とともに、専門家の指導に従うべきだとすることに反対の考えをもつ傾向が強かった。

以上のように、離乳の選択は様々な要因が複雑に絡まりあってなされていることが、本研究から明らかになった。これまでも、たとえば社会階層の影響や医療・地域などのサポート、あるいは母親の信念や、母乳哺育の実施における多様性とその継続を支える要因の指摘がなされてきている (Ballabriga & Rey, 1987; Houston, 1981; Houston et al., 1983; Hull & Simpson, 1985; Jones, 1986; Lindenberg et al., 1984; Quant, 1986; Whichelow, 1982など)。この研究は、日本での全国規模の調査であるということもさりながら、とくに母親と子どもの主導性の所在をめぐっての分析、日本で全国的に一律に行われている健診や育児・離乳指導の影響の吟味、母親の育児に対する態度との対応性の検討、という3点において特徴を持つ。

結果からは、親の育児をめぐる価値観が大きく離乳の主導性のあり方を規定していること、それは出産歴や学歴、就労の有無などの母親の属性を反映していること、また地域での育児についての指導によって日本の母親は大きく規定されること、そこには厚生省の通達という独特の要因への考慮が必要なこと、といった点が指摘できた。母親は、母乳を理想的な食物であるとみているが、その理想的食物は、やがて1歳を迎えるころには中止すべき食物に変貌する。そこから母親と医療専門家間のコンフリクトが生じる可能性がある。また子どもは必ずしも1歳までに自ら乳離れをするわけではなく、むしろ子の自主性に任せると離乳が1歳までに完了することは希である

(Dettwyler, 1995)ということからすると、1歳時点の離乳という考え方は母子間においてコンフリクトを生む可能性もある。このように、離乳とは親・専門家・子どもの3者間の主導性の衝突が表面化する事態であるということもできる。

子に対し親が主導性をより強力に発揮して早く離乳をした母親達において、育児に対して否定的感情をより強くみられたという事実はその点で重要であろう。一部の母親は専門家の指導に依存する度合いが強く、それが離乳のスタイルを決定する一つの重要な変数になっていることが確認された。とくに専門家の指導への依存度の高い母親において、育児への否定的感情が強いという対応が見られたことの意味については、それがいかなる因果性によるものなのか、つまり育児に否定的な親が専門家の指導を仰ぐのか、あるいは依存性の高い親が育児の主体性を損なって否定的感情に傾くのか、よく吟味する必要がある。いずれにせよ、離乳を含む育児における専門家のアドバイスや規制が育児のあり方と大きく対応しているという事実の重さに改めて思いをいたし、印刷物やテレビ・ラジオなどのマスメディアによるメッセージを含めて、



専門家のあるべき関与の姿について慎重に検討する必要がある。折りしも1995年に厚生省の指導が改定されており、その影響の広がりを検証することは、そういった社会的要因のもつ規定性の大きさを考えるまたとない機会となるであろう。その答えは、2000年度からの第2次調査の結果を待って提出したい。

## 引用文献

1. Ballabriga, A., & Rey, J. 1987 *Weaning: Why, what, and when?* Raven Press.
2. Bronfenbrenner, U. 1979 *The ecology of human development: Experiments by nature and design.* Massachusetts: Harvard University Press. (磯貝芳郎・福留護訳 人間発達の生態学：発達心理学への挑戦 1996 川島書店.)
3. Dettwyler, K. A. 1995 A time of wean: The Hominid blueprint for the natural age of weaning in modern human populations. In: P. Stuart-Macadam & K. A. Dettwyler (Eds.), *Breastfeeding: Biocultural perspectives.* Aldine de Gruyter, pp. 39-73.
4. Houston, M. J. 1981 Breast feeding: Success or failure. *Journal of Advanced Nursing*, 6, 447-454.
5. Houston, M. J., Howie, P. W., Smart, L., & McNeilly, A. S. 1983 Factors affecting the duration of breast feeding: 2. Early feeding practices and social class. *Early Human Development*, 8, 55-63.
6. Hull, V., & Simpson, M. 1985 *Breastfeeding, child health and child spacing: Cross-cultural perspectives.* Croom Helm.
7. 今村栄一 1981 離乳の基本：離乳食幼児食研究班報告と解説 医歯薬出版.
8. Jones, D. A. 1986 Attitudes of breast-feeding mothers: A survey of 649 mothers. *Social Science & Medicine*, 23, 1151-1156.
9. 柏木恵子 1999 子どもの価値 (value of child) : 社会変動と人口革命の下で 東洋・柏木恵子編「社会と家族の心理学」 ミネルヴァ書房 163-195.
10. 柏木恵子・若松素子 1994 発達心理学研究, 5, 72-83.
11. 健康・体力づくり事業財団 (編) 1987 全国健康増進施設要覧 コスモ・リサーチ.
12. Lindenberg, C. S., Artola, R. C., & Estrada, V. J. 1990 Determinants of early infant weaning: A multivariate approach. *International Journal of Nursing Study*, 27, 35-41.
13. Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. 1975 *The psychological birth of the*

- human infant. New York: Basic Books. (高橋雅士・織田正美・浜田紀訳  
乳幼児の心理的誕生 黎明書房 1981)
14. Manderson, L. 1984 'These are modern times': Infant feeding practice in Peninsular Malaysia. *Social Science & Medicine*, 18, 47-57.
  15. 中山まき子 1992 妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識：子どもをく授かる>・<つくる>意識を中心に 発達心理学研究, 3, 51-64.
  16. 根ヶ山光一 1989 子育ての論理 糸魚川直祐・日高敏隆編「ヒューマン・エソロジー」 福村出版 pp. 59-75.
  17. 根ヶ山光一 1995 子育てと子別れ 根ヶ山光一・鈴木晶夫編「子別れの心理学」 福村出版 pp.12-30.
  18. 根ヶ山光一 1996a 離乳期までの食行動 中島義明・今田純雄編「たべる：食行動の心理学」 朝倉書店 pp. 66-78.
  19. 根ヶ山光一 1996b サルの子別れ・ヒトの子別れ 青少年問題, 43, 26-31.
  20. 根ヶ山光一 1997 親ばなれ・子ばなれの心理：自立性の生涯発達 児童心理, 662, 1-10.
  21. 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店.
  22. 桶谷そとみ 1982 桶谷式乳房管理法の実際：実技編 鳳鳴堂書店.
  23. Quant, S. A. 1986 Patterns of variation in breast-feeding behaviors. *Social Science & Medicine*, 23, 445-453.
  24. Raphael-Leff, J. 1983 Facilitators and regulators: Two approaches to mothering. *British Journal of Medical Psychology*, 56, 379-390.
  25. Rijt-Plooi, H.H.C. van de, & Plooi, F.X. 1993 Distinct periods of mother-infant conflict in normal development: Sources of progress and germs of pathology. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 34, 229-245.
  26. Trivers, R.L. 1974 Parent-offspring conflict. *American Zoologist*, 11, 249-264.
  27. Valsiner, J. 1997 Culture and the development of children's action: A theory of human development, 2nd ed. New York: John Wiley.
  28. Whichelow, M. J. 1982 Factors associated with the duration of breast

feeding in a privileged society. *Early Human Development*, 7, 273–280.

29. WHO 1981 Contemporary patterns of breast-feeding. WHO.

研究 2 : 断乳 (桶谷式) と  
卒乳 (ラ=レーチェ=リーグ) の比較

## 序

身体とは、環境からある緊張を保ってまとまっている資源の体系であり、生きていくということは、その体系をくずさず維持もしくは変容させることである。食は、そのために行う環境から身体への資源の移動である。また、環境に存在する食資源のほとんどは、それが植物体であれ動物体であれ、実はそれ自体も身体である。つまり私たちは、相手の身体という資源の体系の全部もしくは一部を取り込むことによって自らの身体という資源の体系を養い、同時に摂取するべきでない負の資源を選別し排除することによって、生命を維持しているのである。

生物界には、そのような「食うか食われるか」という抜き差しならない側面だけではなく、たとえば他の生物が自らのために摂取した栄養を一部横取りしたり、あるいは乳汁や老廃物などの他の生物の産物を摂取するなど、もっと穏やかなかたちで他の生物から資源をもらう「寄生」や「共生」といった関係もある。哺乳類の母子関係における胎盤や乳腺を通じた栄養の受け渡しは、まさにこのような食である。

哺乳類の母子関係は、妊娠と哺乳という保護を行うことを基本的な特徴とする。それは食の観点からいうと、上述のような環境資源と子どもの身体との関係に母親がインターフェイスとして介在し、そのシステムによって環境資源が子どもの身体に取り込まれることを助けているとみることができる。食というのは、選択・獲得から消化・吸収までの一連の行動からなり、母子関係においてはそのような子どもの食過程を、子どもが未熟なあいだは親が全面的または部分的に代行してやって、徐々にその代行を削減していくのであり、その過程がすなわち離乳である(根ヶ山, 1996a)。つまり離乳とは、本質的に母子の関係の発達的变化であり、子どもの自立過程なのである。

上記のような離乳による子どもの自立は、親が子どもを拒否する形で導かれるのか、それとも子ども自身が離れることで進行するのか。Trivers (1974) は、離乳期の母子が資源をめぐるせめぎあう対立的関係にあると主張した。その対立相は、繁殖が反復性の営みであり、育児の負担を当該子と次に育てるべき子のどちらに振り向ければより繁殖上の効率がよいかに関して親と子の間に不一致が生じることによって起こるといえるのが、その考え方の骨子である。つまり子の成長にともない、親は次の繁殖にエネルギーを注ごうとし、子は今しばらく保護の維持を要求するという矛盾した時期がやってきて、それが母子間にコンフリクトを生むというのである。そして、子

の発達過程によってコンフリクトが長引く種もあれば短期間で終わる種もあるという。

霊長類の母子関係を実際に観察してみると、確かに両方のタイプがあり（根ヶ山, 1996b）、ヒトにもっとも近いとされる大型の類人猿では、親からの拒否というかたちで離乳が主導されることはあまりなく、近接の許容を基礎とした保護的な関係が比較的長く続く。ところがヒトの場合、母乳哺育期間は国や地域によって驚くべき多様性が指摘されている（WHO, 1981; Ballabriga & Schmidt, 1987）。ヒトの離乳が複雑な様相を呈しているのは、人工乳があったり、離乳食の準備や供給の負担があったり、あるいは女性の育児や社会参加に対する価値観に違いがあったりと、単純な栄養資源のエネルギー経済学ではうまく説明できない要素がたくさん絡んでいるためであろう。Raphael-Leff (1983) が指摘する受容型と統制型というふたつのマザリングのタイプは、育児において母親が自分自身の要求と子どもからの要求をどう重視するかの違いであるが、そこで問題になっている資源は栄養ではなく、育児に割かれる時間という資源を考えるべきだとも思われる。

本研究は、離乳のスタイルが母子関係の特性を描き出す非常に有効な断面であるという考えのもとに、実際に我々の離乳をめぐる母子の行動をつぶさに観察することを通じて自立の発達機制について何らかの示唆を得ようとしてなされたものである。具体的になされた研究は、桶谷式断乳という、子どもの発達段階を踏まえつつも親の意志に大きく依存する離乳法の観察・質問紙調査と、ラ・レーチェ・リーグの提唱する「卒乳」という、子どもの自主性を重んじる離乳法の観察である。このようなふたつの大きく異なる離乳の様式が今日我々の身近で併存していることは、育児の多様化を意味するものであると思われるが、それはまた育児に関する混迷の反映という意味を含んでいるのかもしれない。ふたつの異質な離乳法が同時代的・同所的に併存することによって、歴史や人種などの要因に紛らわされずにそれらを比較することができるのは大きなメリットである。

### 桶谷式断乳の研究

桶谷式断乳の研究としては、前述の通り観察と質問紙調査もしくはインタビューを行った。桶谷式断乳とは、助産婦である桶谷そとみ氏が開発した母乳哺育終了のための一手法である。生後1年をすぎ、すでにひとり歩きを始め、固形食を本格的に食

べ始めている子に対し、ある特定の日を決め、その朝に授乳したあとで乳房に顔の絵を描いておき、次に子どもが乳を求めてきたときにそれを提示し、もはや乳首に口唇では触れさせないという手続きを踏んで離乳させるものである。この方法は、親の主導性が相対的に大きな離乳方法として位置づけることができる。

## 方法

桶谷式断乳を指導する大阪市内のK総合病院を通じ、協力者を求めた。そしてビデオ観察の協力を同意した母親を対象に、下記の要領で家庭での断乳撮影と断乳直前直後の気持ちについてのインタビューを行った。またビデオ撮影には協力しないが質問紙調査には同意した母親（39名）には、病院外来経由で、断乳に関する感想や断乳後の子どもの行動変化についての質問紙を配付し、後日郵送にて回収した。

ビデオ観察については、あらかじめ断乳を予定している母親に承諾を得て、その断乳当日に家庭を訪問し、断乳の様子をその開始後最低15分間筆者がビデオカメラによって撮影した。観察に際しては、撮影者の存在はできるだけ無視して行動するように母親および家族に依頼した。また、撮影の続行・中断はまったく母親の判断によることも告げられ、そののちに撮影が開始された。撮影中母子が大きく隔たったときには、子どもを対象にして撮影を継続した。さらに、断乳後数日間の子どもの行動変化を質問紙によって回答してもらった。協力者は母子11組で、そのうちの6組が第1子、残り5組が第2子以降であった。

## 結果

まず、断乳開始後15分間の行動観察をもとに、断乳開始後の経過時間を5分ごと3ブロックにわけ、それと出生順位（長子か否か）による2要因の反復測定分散分析を行った。分散分析の結果、第1子に比べて第2子以降に接触が多く（Figure 1,  $F(1, 9) = 6.69, P < 0.05$ ）、距離が0.5m以上開くこと（「遠隔」）が少なかった（ $F(1, 9) = 10.64, P < 0.01$ ）。時間経過による変化については、どちらの距離においても10%レベルで有意な傾向が見られ、15分間に母子間の距離がひらいていく傾向が認められた。交互作用については有意ではなかった。

また第1子には、観察中の位置移動が多く、泣きが少ないという有意に近い傾向



が見られた（位置移動： $F(1, 9) = 4.74, P < 0.10$ ；泣き： $F(1, 9) = 3.47, P < 0.10$ ）。

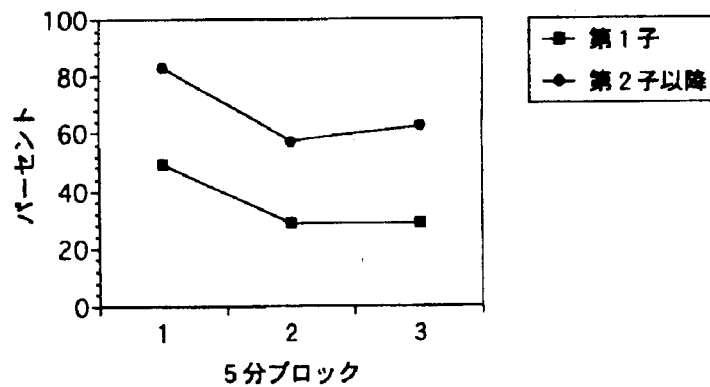


Figure 1. Body contact between mother and child (母子間接触)

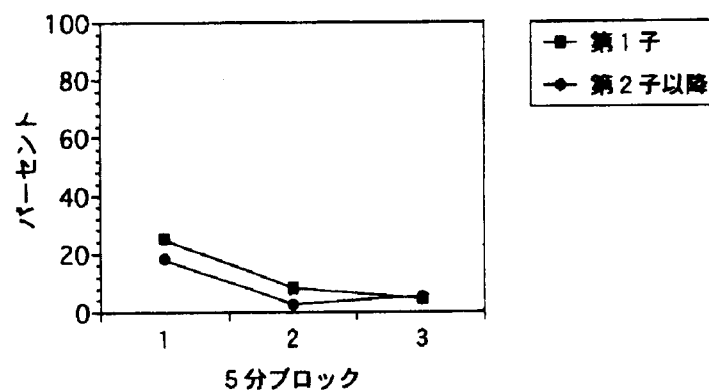


Figure 2. Manual contact with breast (乳房指触)

なお、いずれの行動においても、有意な性差はみとめられなかった。

予期に反して、顔の絵の描かれた乳房に対する子どもの関わりかけは全般に乏しく、とくに摂乳の対象として口唇を近づける行動は、最初の5分間に少し発現し、その後ほとんど見られなくなった ( $F(2, 18) = 4.67, P < 0.05$ )。また乳房の指触に関しても、時間の進行とともに減少する傾向が有意であり (Figure 2,  $F(2, 18) = 11.82, P < 0.001$ )、それにもなって子どもの微笑反応も減少傾向をみせた ( $F(2, 18) = 2.71, P < 0.10$ )。関わりの内容としては、手で乳頭をつまんだり乳房を押したりという行動が主で、絵の描かれた乳房が摂乳というよりはむしろ、おもに探索または遊びの対象となっていたといえる。

乳頭への口唇接触・指触のいずれにおいても、出生順位の主効果およびそれと経過時間との交互作用はいずれも有意でなかった。

次に、断乳前の断乳観と、断乳直後の感想についてインタビュー・質問紙によって尋ねた結果をもとに、断乳前における母親の断乳への考えを数量化3類によって分析した。その結果、断乳前の母親の意識として、1軸は「かわいそうだ」など子への不憫感を、2軸は「早く断乳したい」「長く母乳を続けたくない」など断乳への期待感をそれぞれ表すと解釈され、子への不憫感・母親自身の拒否感をと断乳への待望感とが両面的に混在していた (Table 1)。また、あらかじめ用意した30語への重複を許した選択によって断乳直後における感想を尋ねたところ、「さびしい (母親の60%が選択)」「大変だ (54%)」「かわいそうだ (46%)」「つらい (40%)」「いとおいしい (36%)」「不安だ (32%)」などの否定的回答が多かったが、同時に「あっけない (38%)」「不思議だ (32%)」「ほっとする (26%)」「おもしろい (20%)」などの意外感や肯定感も比較的多かった。

Table 1. Analysis of mothers' perception of *Dannyu* before doing it by Quantification method III (断乳前の断乳観に関する数量化3類による分析)

	1 軸	2 軸
かわいそうだ	0.67	0.14
長く母乳を続けたい	0.24	-0.54
早く断乳したい	-0.34	0.69
こわい	0.40	0.29
楽しみだ	-0.23	-0.06
母親にいい	-0.18	-0.08
子どもにいい	-0.36	-0.34
うまく逝くか心配だ	0.01	0.07
寄与率 (%)	24.3	20.4

断乳後の変化について後日回収された回答をもとに分析すると、子が母乳を求めたもっとも激しく泣くのは、断乳直後ではなくいずれの家庭でもその夜であった。そ

して夜間の泣きの発現は、ふつう数日間持続してみられ、その後原状復帰した（平均 4.2 ± 3.0 日所要）。夜間も母乳を求めて泣かなくなるまでの所要日数と断乳場面でのビデオ観察の行動頻度を対応させたところ、主な母・子行動の生起率と日数の間には、有意な相関はまったくみいだされなかった。

断乳後 4～5 日目時点における様子を尋ねた結果に対する数量化 3 類による分析からは、子の自立が進んだ（1 軸）とみる一方で、母親には子どもへの接近が強まったという変化を読みとることもできた（Table 2）。

Table 2. Analysis of changes in mothers' and children's behaviors following *Dannyu* by Quantification method III (断乳 4～5 日後の母子に関する数量化 3 類の分析)

	1 軸	2 軸
わがままになった	-0.61	0.43
甘えん坊になった	-0.50	-0.11
たくましくなった	0.33	0.34
ききわけがよくなった	0.30	0.36
自立が進んだ	0.28	0.27
距離をおいて子を見ることが出来るようになった	0.26	-0.60
子のことが気にかかるようになった	-0.19	-0.32
子がさらにいとおしくなった	0.00	-0.13
寄与率 (%)	33.3	19.3

断乳に対する事前の態度が母親の育児観の内容とどう対応するのかを調べるため、育児観に関する質問について数量化 3 類（Table 3）によって求められた 3 軸までの数値を Table 1 で行った分析によって得られた軸の数値と相関させたところ、Table 3 の 2 軸における育児回避的な育児観と断乳前の断乳待望感にのみ有意な相関がみられた（ $r = 0.40$ ,  $P < 0.05$ ）。

Table 3. Analysis of attitude toward child-rearing by Quantification method III  
(育児観に関する数量化3類による分析)

	1 軸	2 軸	3 軸
育児に不安がある	-0.47	0.36	0.19
自分は母親失格だ	-0.49	0.40	0.08
子供の世話をしていると幸せだ	0.07	-0.49	0.07
厳しくしつけてこそ自立できる	0.36	0.12	0.08
子育てはうまくいっている	0.25	0.08	0.58
したいことができず焦る	0.14	0.23	-0.53
子どもはのびのび育てるべきだ	-0.13	-0.06	0.03
育児ノイローゼに共感できる	0.16	0.07	-0.44
子がかすがいだ	-0.08	-0.02	0.13
子どもは尊重されねばならない	-0.06	-0.08	0.03
子育ては負担だ	0.40	0.32	0.27
母親業は生き甲斐だ	-0.01	-0.30	0.20
子育てをしていると取り残される	0.32	0.44	0.02
寄与率 (%)	18.5	17.0	12.7

断乳を過去に経験している母親は、事前の断乳待望感がより少ないという有意な対応がみられた。また断乳数日後に断乳をひとにも勧めたいかと尋ねたところ、「勧めたくない」と答えた母親は全体を通じてごくわずかであったが、断乳観として子が不憫だとの考えをもっていた母親は、「どちらともいえない」との考えを示すことが有意に多かった。

#### 考察

桶谷式断乳場面においては、意外なほどあっけなく離乳がスタートし完了する。そこでは、乳房は摂乳の対象としてかわられることが少なく、むしろ遊びの対象とみなされる傾向があり、それは乳房に描かれた絵の効果にもよるものと推測される。その場における子どもの反応から推測して、おそらく断乳開始の場面を多くの子どもは摂乳拒否場面ととらえるよりは、母親が遊びかけてくる場面と見なしていたように

思われる。そして、親の決然とした拒否的態度をくり返し経験することによって、やがてその真意を理解するようになる。早い子はその観察場面の終了までにすでにそのことを察知し、号泣することもあったが、多くの子どもは、就寝前という子どもの乳頭志向が1日のうちでもっとも高まる時においてそれを決定的に知らされ、激しく抗議するところとなる。その激しさは、しばしば母親の決意を揺るがせ、断乳を断念させてしまうこともあるほどだという。したがって親子の行動的対立相は、この場合むしろ夜間にはっきりと見られていたといえよう。

一方母親は、子への不憫感と断乳への期待との両面的態度をもってその場に望んでいた。断乳直後、母親は断乳に対し否定的感情を多少強くもつが、他人にも勧めるかという次元では、大なり小なり肯定感をもってそれを受けとめていたことが示唆された。母親が断乳後肯定的に受けとめていた理由のひとつはおそらく、この手法による離乳の達成の驚くべき早さであろう。数日の摩擦を経たのちは、子どもはあっさりと何事もなかったかのように乳を求めなくなり、母親の乳房を見ても、もはや求めてこようとはしなくなるという。この急激な変化は、それまでの乳への執着を考えると意外な観があるが、子どもの柔軟性がそれほど高いということを示すものととらえるべきであろう。

第2子以後の方が第1子よりも、断乳に対する反応として母親への接近性をより強めた。長子に比べて次子には甘ったれで依存的な性格特性が指摘できるということが小中学生での調査で指摘されている（依田，1967）。しかしこの場合は、そのような傾向が1歳時点ですでに存在しうると考えるよりむしろ、第2子以降が母親の行動変容に敏感に対応し積極的な反応をしていたという意味で、彼らの社会的スキルの高さの現れと解することのほうが妥当性が高いのではなかろうか。桶谷式断乳という母親主導的な離乳方法は、短期間に子を離乳させるには効果的で興味深い方法である。動物行動学の領域において、とくにキタキツネなどで「子別れの儀式」といわれる離乳のあり方が指摘されているが、それとても親は実際には段階的に分離を促すものらしい（池田・塚田，1993）。霊長類レベルでは、乳頭接触の減少は長期にわたる持続的過程である（Hinde & Spencer-Booth, 1967）。それらの動物研究の知見は、この手法がもたらすものとはかなり異なっている。それが、断乳の後母子ともに一過的に過酷な時期を過ごさねばならないということと関連しているのかもしれない。しかしなんらかの人為的手段によって強制的に離乳をさせるということは、文化的にみ

ても他に例のないことではない (Cosminsky, 1985 ; 菅原, 1993) . 強制的に離乳することの長期的影響については, 検討の余地があるであろう. 断乳という切断のし方に対して母親が両面的にとらえていることは, 調査結果が如実に示すところである. だが桶谷式断乳は, 日本の結合志向的な育児風土において, 一種の「通過儀礼」的な意味合いをもっているように思われる. 結合が強いからこそ切断の力が要求されるということは, 霊長類の近縁種比較からも示唆されている (Kaufman & Rosenblum, 1969) .

ここでの結果はあくまでも断乳後の短期的な資料によるものであるため, その正しい評価については, 今後さらに長期的な追跡調査を行うとともに, 他の離乳方法の実態との比較を待たねばならない. 従来, 桶谷式断乳が心理学的研究の俎上に載せられることはなかったが, 今後の研究の展開が期待される.

#### ラ・レーチェ・リーグによる卒乳過程の追跡観察

目的 断乳以外に我々が選択しうる離乳方法の対極として, 「卒乳」すなわち離乳を親が主導せず, 子どもの主体性に任せるというやり方がある. この離乳手法は, 断乳のように特定の時点に焦点化して研究することはできず, 長期にわたる追跡研究のスタイルをとらざるを得ない. そのような追跡調査を通じて, 親の圧力によらない, いわば子ども自身の内発的变化による離乳過程というものが明らかにされることが期待される. それとともに, 断乳調査との比較を通じて, ヒトの離乳過程における親子の主導性のあり方の吟味を行おうというのが, 本研究の目的である.

#### 方法

母乳哺育と卒乳を実践するラ・レーチェ・リーグに接触し, そのメンバーのなかから, 出産直後から離乳完了までの追跡調査に対する協力者3名を得た. その3名はいずれも経産婦であり, その子どもは男児2名・女児1名であった. それらを出生直後から定期的に(毎月1~2回)家庭訪問し, そこでの授乳場面の母子行動と, 離乳食開始後はその食事行動とを, ビデオカメラによって一部始終録画した. そしてその観察を, 離乳完了まで継続して行った(3例それぞれ2歳3か月, 3歳0か月, 3歳2か月). 撮影に際しては, 断乳観察と同様に, 極力平常の通り行動することを要請

し、その哺乳と食事の開始・終了はまったく子どもと母親に任せた。なお、本報告はそのうちの哺乳場面のみを対象としている。

## 結果

まず、3年間にわたる1回あたりの哺乳場面での子どもによる乳頭接触の時間推移を、3例の中央値によって示したのがFigure 3である。ここでいう1回分の哺乳とは、10分以上の中断を含まない乳頭接触行動のまとまりを指す。これをみると、3年間の哺乳の時間変化に関しては、生後3か月間にもっとも長い哺乳が見られたあとは、ほぼ一貫して同じような長さで哺乳が行われていたことがわかる。母親が抵抗する子どもを乳頭からむりやり離すという母親主導の分離は、これらの母子には基本的に見られなかったが、ただし子どもが乳頭を噛む行動を示したときには発現した。噛む行動は子どもの歯牙の萌出と関連した行動とされるが、しかし面白いことに、発達の過程でほとんどが生後半から1年半の間に一過的に発現したあと消失してしまっており、単に歯牙の萌出によってもたらされる行動であるということとはできない。乳頭を噛む行動にはしばしば子どもの微笑行動が伴っていた。それは噛むことによって母親の特定の反応を誘発する、という「社会的遊び」に近い状況であることを示すものと思われた。

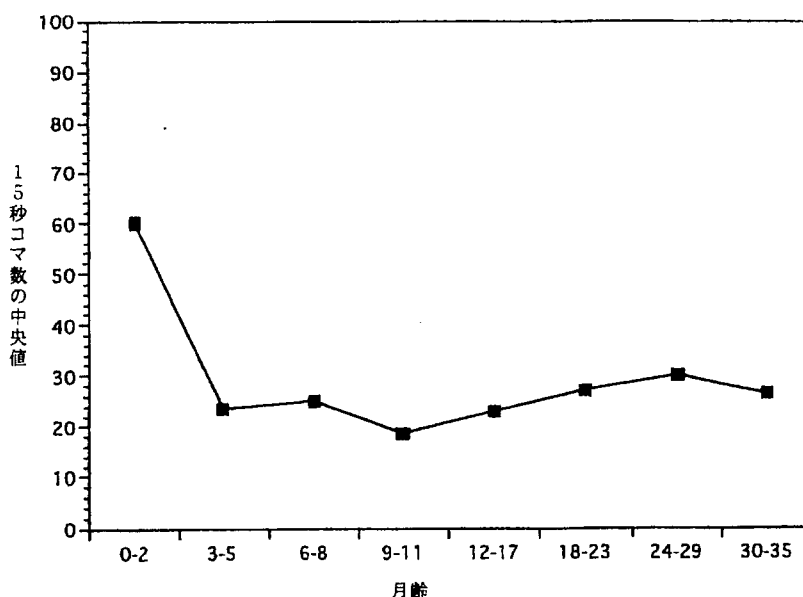


Figure 3. Developmental change in duration of nipple contact (1回の哺乳における乳頭接触時間の発達の推移)

さて、そのことをさらに明瞭に示すのが、次に示すFigure 4である。これは1回の哺乳中に子どもがどれくらい乳頭から口を離れたか、さらにどれくらい閉目したかを表したものである。これらに関しては、子どもの遊びなどで得乳頭接触が1分以上10分未満にわたって連続的に中断した場合は分析の対象としていないが、1分未満の中断においてはカウントした。乳頭から口を離す行動は、母子が表情や発声などによる交渉をすることに連係しており、活発な母子交流の指標といえる。その結果2年目から、哺乳中の母子交渉の内容が、覚醒的なものから鎮静的なものへと質的に次第に変容することがわかった。乳頭を噛むという行動は、実はこの変化の狭間に一過的に生じていた現象であった。

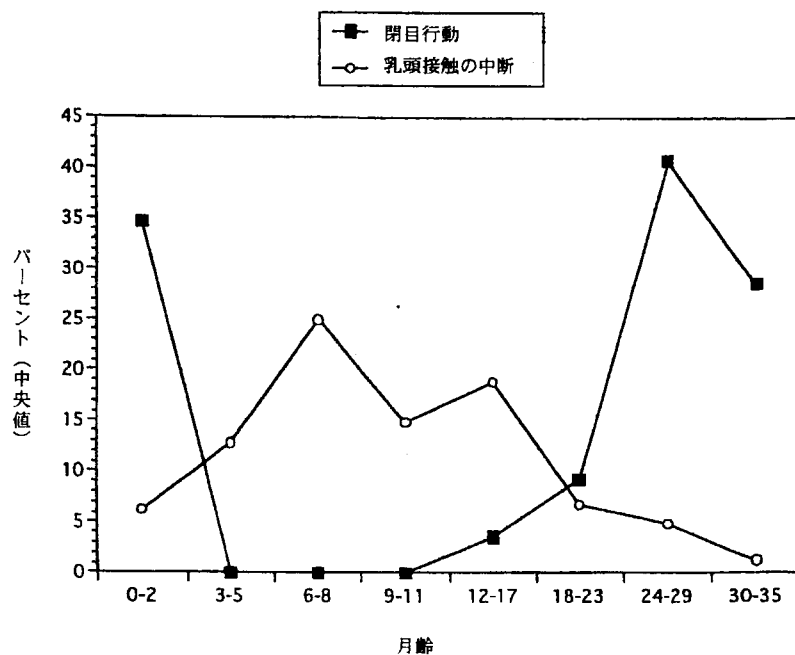


Figure 4. Developmental change in nipple contact pause and eye closing (1回の哺乳における乳頭接触の中断と閉目行動の発現)

### 考察

大型類人猿は、生後数年にわたって乳頭との接触を継続させるとされている。そして、その接触が消失する時期と次子出生の時期とがほぼ対応している (Clark, 1977)。本研究の結果、ヒトの離乳も子主導で実施すると生後数年におよぶ過程となりうることを示された。

しかしながら、その期間における哺乳時の行動は決して一様ではなかった。とくに生後1年目の終わり前後において、交流的・高揚的なやりとりが鎮静化するという急激な変化がみられた。その変化は、哺乳が子どもの就寝（この観察場面では昼



寝)の前によく行われるようになるという変化の反映であった。

生物学的に、哺乳による排卵抑制という現象があることはよく知られており、それが個体数調節に関係していることもいわれている (Anderson, 1983)。つまり哺乳は母親から未熟な子への栄養資源の移行の形ではあるが、同時に本来より大きな繁殖のシステムに多層的に組み込まれた、母子双方に重要な行動なのである。離乳を栄養の観点からのみ論じるのは、偏狭な立場である。

その点で、交渉が鎮静化しつつも、あと2年近く摂乳(もしくは口唇による乳頭接触)が続いたという事実は、きわめて意味がある。つまり、乳頭接触が子どもの身体維持という機能から別の機能(より心理的な)へと推移していったことが強く示唆される。その推移とは、生後1年以内の哺乳場面が栄養移行と母子の積極的交流という2つの異なった機能の充足の場であって、それ以降それらの機能がともに薄れ、別の機能、すなわち乳頭への接触を通じた心理的安定の機能が大きくなるという変化である (Clark, 1977)。その変化は、子どもの移動能力の発達にともなう外界志向と関係しているかもしれない。その節目の時期に乳頭を噛むという反発的遊びが発現したのは偶然ではなからう。

その節目はまた、第二次間主観性 (secondary intersubjectivity, Trevarthen & Hubley, 1978) の発現時期とも概ね対応している。その時期以降、母子の交渉はモノが介在して3項関係的に展開される傾向を強めるのであろう。それは裏返すと、モノの介在を欠く哺乳という母子接触の形が、遊びの場面として成立しにくくなったということでもあり得る。

### 総合論議

冒頭にも述べたとおり、離乳は母子関係を基調づける枠組みである。母乳授乳が母親の負担として大きいためもあって、離乳をどう進めるかは母親の大きな関心事である。母親にはその進行過程に思惑があり、子には生物的要求があるので、その移行はまさに母親の思惑や身体状況と子の要求の調整過程であり、ヒトの多様な離乳スタイルは、子どもと親双方の個体差における多様性の組み合わせの産物である。

本研究で得られた重要な知見のひとつは、卒乳のように母親からの強制がない場合においても、生後1年たった時点以降哺乳が加速度的に質的变化を迎えるということである。この時点はまた通常の離乳食においても、母親の主導による受け身的な摂

食を脱し、子自身が自発的に摂食を開始する時期であった (Negayama, 1993) . またこの時期は、母親の供給を子どもが拒否したり、子どもから母親への食供給が遊びの文脈で見られたりというように、行動的に子どもの自立を示唆する行動が急激に見られるようになった母子関係の大幅な変節点である。

それらのことをふまえて、桶谷式断乳における1歳以降の実施という、もともと経験則によって導かれた離乳の実施を心理・行動学的にどう評価すればよいのであろうか。もし、乳頭接触への栄養以外の心理的志向性があるのならば、断乳は子どもの行動の節理を無視した母親主導の離乳であるということになる。しかし、単純にそう考えて否定するにすれば、この方法の効果はあまりにも顕著である。

ここで考えておかねばならないことは、子どもにおける乳頭接触の要求と並行して、1歳を過ぎた時期には母親との関係がより対等化し、行動的自立が顕著になってくるという事実である。つまり、この時期の子どもには子の主導性における自立の要求も強くなるということである。そのことはたとえば、母子の遊びにも子どもの積極的参加による対等性の増加として見られる (Gustafson et al., 1979) . 離乳過程とは、依存と自立の混在した過程なのである。

桶谷式断乳においては、子どもの一定のレディネスを待ってからなされるというガイドラインが、それを単なる母親主導ではない方法にしている。また、乳頭接触によって求められる心理的効果を、これらの母子はおそらくそれ以外の仕方で補償しているからこそ、子どもはその事態を短期間で受け入れることができるのだろう。桶谷式断乳は、断乳という言葉が与えるよりも、実際にはもっと子主導性を認めた離乳の方法といえるのではなかろうか。

このように離乳は、狭義には栄養資源の移行形態の変化であるが、同時にそれをこえて母子の個としての「相互的自立」という母子関係の変化でもある。「個」性をもつということは、単に栄養に限らず、時間や空間などの資源を含めて、自分でその裁量権を持つことである。子主導性の尊重は子どものもつその裁量権を認めてやろうとする立場といえ、ラ・レーチェ・リーグの方式もその姿勢の現れであろう。ただし、子どもの個を尊重するということは、子どもに母親自身を含めた他者と対等の主体性を認めることであって、子どもだけを絶対化することではない。そのように考えるならば、本研究でとりあげたふたつの一見大きく異なる離乳のスタイルを支える母子関係観のめざす理想像は、育児行動全体のなかに位置づけてみた場合には、見かけ

ほど異質なものではないのかもしれない。

#### 引用文献

Anderson, P. (1983) Thereproductive role of the human breast. *Current Anthropology*, 24, 145-161.

Ballabriga, A. & Schmidt, E. (1987) Actual trends of the diversification of infant feeding in industrialized countries in Europe. In A. Ballabriga & J. Rey (Eds.) *Weaning: Why, What, and When?* New York: Raven Press, Pp. 129-146.

Clark, C.B. (1977) A preliminary report on weaning among chimpanzees of the Gombe National Park, Tanzania. In S. Chevalier-Skolnikoff and F. E. Poirer (Eds.) *Primate Biosocial Development: Biological, Social, and Ecological Determinants*. New York: Garland, Pp. 235-260.

Cosminsky, S. (1985) Infant feeding practices in rural Kenya. In V. Hull & M. Simpson (Eds.) *Breastfeeding, Child Health, and Child Spacing*. London: Croom Helm, Pp. 35-54.

Gustafson, G.E., Green, J.A., & West, M.J. (1979) The infant's changing role in mother-infant games: The growth of social skills. *Infant Behavior and Development*, 2, 301-308.

Hinde, R.A. & Spence-Booth, Y. (1967) The behaviour of socially living rhesus monkeys in the first two and a half years. *Animal Behaviour*, 15, 169-196.

池田透・塚田英晴 (1993) キタキツネ：その繁栄要因と人間社会 東正剛・阿部永・辻井達一 (編) 生態学から見た北海道, 北海道, 北海道大学図書刊行会, Pp.250-257.

Kaufman, I.C., & Rosenblum, L.A. (1969) The waning of the mother-infant bond in two species of macaque. In B. Foss (Ed.) Determinants of infant behaviour, Vol.4. London: Methuen, Pp.41-59.

根ヶ山光一 (1989) 子育ての論理 糸魚川直祐・日高敏隆 (編) ヒューマン・エソロジー, 東京, 福村出版, Pp. 59-75.

Negayama, K. (1993) Weaning in Japan: A longitudinal study of mother and child behaviours during milk- and solid-feeding. *Early Development and Parenting*, 2, 29-37.

根ヶ山光一 (1996a) 離乳期までの食行動 中島義明・今田純雄 (編) たべる, 東京, 朝倉書店, Pp.66-78.

根ヶ山光一 (1996b) サルの子別れ・ヒトの子別れ, *青少年問題*, 43, 26-31.

Raphael-Leff, J. (1983) Facilitators and regulators' Two approaches to mothering. *British Journal of Medical Psychology*, 56, 379-390.

菅原和孝 (1993) 身体の人類学, 東京, 河出書房新社.

Trevarthen, C. & Hubley, (1978) Secondary intersubjectivity: confidence, confiding and acts of meaning in the first year. In A.Lock (Ed.) *Action, Gesture and Symbol: The Emergence of Language*. London: Academic Press, Pp. 183-229.

Trivers, R.L. (1974) Parent-offspring conflict. *American Zoologist*, 11, 249-264.

依田明 (1967) ひとりっ子・すえっ子, 東京, 大日本図書.

WHO (1981) Contemporary patterns of breast-feeding. Geneva : World Health Organization.

(本研究は, 行動科学, 1997, 36, 1-11に発表)

巻末資料 1. 打診用往復はがきの返信部分

早稲田大学人間科学部 根ヶ山光一助教授  
によって行われる研究に、

協力する

協力しない

(どちらかに○をつけて下さい)

配付可能部数：( ) 部

(1～2か月間で実施していただくものと  
し、200部以下とお考え下さい)

機関名：

代表者ご氏名：

ご担当部署名：

ご担当者名：

所在地：

お電話番号：( ) -

FAX番号：( ) -

## 巻末資料 2. 離乳調査に用いられた質問紙

保護者各位

早稲田大学人間科学部助教授 根ヶ山光一

### 離乳の実態調査についてのご協力をお願い

私は早稲田大学人間科学部人間基礎科学科において、心理学の立場から乳幼児の離乳に関する研究・教育を行っている者です。このたび、文部省の補助を受け、離乳の実態に関する全国調査を行わせていただくこととなりました。つきましては、まことに一方的なお願いで恐縮でございますが、もしおさしつかえなければ同封の質問紙にご回答いただき、返信用の封筒にてご返送をお願いできませんでしょうか。調査の対象となるのは、この3歳児健診におみえになったお子様です。ご回答内容は統計的に処理され、個人の資料がそのまま公表されることは決してありませんし、ご回答いただくことによって皆さんに何らのご迷惑も生じることはありませんので、安心してご回答下さい。

このアンケートに関するご質問などございましたら、根ヶ山（ねがやま、〒359 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15、早稲田大学人間科学部、研究室直通電話 0429-47-6739）までお願いします。

なお、以下のご回答は、適当な数字に○をつけるか、空欄に文字・数字をご記入いただくかで行って下さい。また、どうしても答えたくないという項目がございましたら、その質問にはお答えいただかなくても結構です。質問は、1枚（表・裏の両面）のみです。お忙しいところまことに恐れ入りますが、このような研究には皆様方のご協力が不可欠ですので、どうか宜しくお願い申し上げます。

## 離乳に関するご質問（ご回答はお母様にお願いします）

1. 日付：西暦（ ）年（ ）月（ ）日
2. ご住所：（ ）都・道・府・県（ ）市・郡（ ）町・村
3. お子様の性別・お歳：(1)男 (2)女，満（ ）歳（ ）か月齢
4. お母様（＝お子様のお母様のことです）のお歳：満（ ）歳
5. お子様はあなたにとって何人目のお子様ですか：（ ）人目
6. お母様はお仕事をお持ちですか？  
(1)はい（フルタイム） (2)はい（パート） (3)自営業 (4)専業主婦 (5)その他（ ）
7. お差し支えなければ，お母様のご学歴をお教え下さい。  
(1)中卒 (2)高卒 (3)専門学校卒 (4)大卒（短大含む） (5)大学院卒 (6)その他（ ）
8. お子様からみた家族構成（同居者に限る）について，該当する方に○をおつけ下さい。  
(1)祖父 (2)祖母 (3)父親 (4)母親 (5)きょうだい (6)その他（ ）
9. 主にどなたがお子様の面倒をみていらっしゃいますか（お1人のみ）：（ ）
10. 母乳栄養・混合栄養の別を問わず，母乳を与えたことがお有りかどうかおうかがいします。  
母乳哺育の期間をお教え下さい。  
(1)満（ ）か月齢～（ ）歳（ ）か月齢（今も継続中の場合は「現在」とご記入下さい）まで  
(2)与えたことがない
11. 育児用ミルク（フォローアップミルクを含む）をお与えになった時期をお教え下さい。  
(1)満（ ）か月齢～（ ）歳（ ）か月齢まで (2)与えたことがない
12. 離乳食（ドロドロ状の食べ物）を初めてお与えになったのはいつですか：満（ ）か月齢
13. 母乳以外の飲み物・食べ物を与え始められた最大の理由を一つだけ選んで下さい。  
(1)母乳の出ぐあい (2)子の月齢 (3)子の母乳離れ (4)母の体調 (5)子の病気・けが (6)次の妊娠 (7)母の仕事 (8)母の哺乳時の不快 (9)家族の要請 (10)おっばいの形状 (11)母乳以外の味への慣らし (12)その他（ ）
14. 母乳を与えたことがお有りの方にうかがいます。母乳をおやめになる時，どのようにされました（ます）か。一つだけお選び下さい。  
(1)親が時期をきめて断乳 [その具体的な方法：1. にが味物質を塗る 2. 絵を描く  
3. それ以外\_\_\_\_\_ 4. 乳房には何もせず]  
(2)断乳せずに，子どもにまかせた（まかせる） (3)その他（ ）
15. そのようにして母乳哺育をおやめになった（なる）理由としては，次のどれが一番大きいですか。一つだけお答え下さい。  
(1)子どものため (2)母親自身のため (3)他の家族のため (4)それ以外（ ）のため
16. 母乳をすでにおやめになった方は，おやめになるときにもっとも強く感じたお気持ちを一つお教え下さい。  
(1)ほっとした安堵感 (2)悲しみ (3)うれしさ (4)やったという達成感 (5)むなしさ (6)特別な感じはなし (7)その他（ ）
17. 離乳を完了された（される）最大の原因は何ですか。一つだけお答え下さい。  
(1)母乳の出ぐあい (2)子の月齢 (3)子の母乳離れ (4)母の体調 (5)子の病気・けが (6)次の妊娠 (7)母の仕事 (8)母の哺乳時の不快 (9)家族の要請 (10)子の食べぐあい  
(11)その他（ ）
18. 離乳についてのお考えは，強いていえば次のどちらにより近いですか。  
(1)なるべく早い方がよい (2)なるべく遅い方がよい
19. それはなぜですか。もっとも大きな理由を一つだけお答え下さい。  
(1)子どものため (2)母親自身のため (3)それ以外（ ）のため
20. 離乳の方法やスケジュールは何に基づいてお決めになりましたか？もっとも大きなものを一つだけお選び下さい。  
(1)自分の母親 (2)友人等の知合い (3)医師・保健婦等 (4)書物・マスコミ (5)自分自身の考え (6)子どもの様子 (7)電話相談 (8)その他（ ）

（裏にもありますので，よろしくお願いします）



21. 保健センターなどの機関から離乳のし方や時期について指導をお受けになりましたか。  
 (1)非常に受けた (2)かなり受けた (3)あまり受けなかった (4)まったく受けなかった
22. 指導をお受けになった場合、その指導はあなたにとってどのようなものでしたか。  
 (1)大変役だった (2)かなり役だった (3)あまり役立たなかった (4)まったく役立たなかった
23. 専門家による離乳指導には従うべきだという意見について、どう思われますか。  
 (1)非常に賛成 (2)どちらかといえば賛成 (3)どちらかといえば反対 (4)非常に反対
24. 次にあげる食品(母乳・人工乳・ベビーフード・手作りの離乳食)についてのお考えはどれに近いですか。〈違う-1, どちらかといえば違う-2, どちらかといえばそうだ-3, その通りだ-4〉の中からお選び下さい。

	母乳		人工乳		ベビーフード		手作り離乳食	
	違う	その通りだ	違う	その通りだ	違う	その通りだ	違う	その通りだ
1. 栄養価が高い	1	2	3	4	1	2	3	4
2. 衛生的である	1	2	3	4	1	2	3	4
3. 経済的である	1	2	3	4	1	2	3	4
4. 簡便である	1	2	3	4	1	2	3	4
5. 安心して使用できる	1	2	3	4	1	2	3	4
6. 味がよい	1	2	3	4	1	2	3	4
7. 健康によい	1	2	3	4	1	2	3	4
8. 愛情がこもっている	1	2	3	4	1	2	3	4

25. お子様は以下の行動がいつから出来るようになっておなりましたか？  
 寝返り：満（ ）か月齢 お座り：満（ ）か月齢 はいはい：満（ ）か月齢  
 独り歩き：満（ ）か月齢
26. 現在のお気持ちとして、そうだと思われるものはどれですか。〈違う-1, どちらかといえば違う-2, どちらかといえばそうだ-3, その通りだ-4〉の中からお選び下さい。

	違う	その通りだ
1 「母親であることが好きである」	1	2-3-4
2 「子どもを育てることが負担に感じられる」	1	2-3-4
3 「親は子どもの前では毅然としていなければならないと思う」	1	2-3-4
4 「母親になったことで人間的に成長できた」	1	2-3-4
5 「育児にかかわっている間に、世の中からとり残されていくように思う」	1	2-3-4
6 「子どもの要求はなるべく尊重するようにしている」	1	2-3-4
7 「母親であることに充実感を感じる」	1	2-3-4
8 「子どもを産まない方が良かった」	1	2-3-4
9 「子どもの幸・不幸は親の責任によるところが大きい」	1	2-3-4
10 「母親になったことで気持ちが安定して落ちついた」	1	2-3-4
11 「自分は母親として不適格なのではないだろうか」	1	2-3-4
12 「母親であることに生きがいを感じている」	1	2-3-4
13 「子どもの個性は最大限尊重している」	1	2-3-4
14 「自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」	1	2-3-4
15 「母親としてふるまっているときが一番自分らしいと思う」	1	2-3-4
16 「子どもを厳しくしつけるのが親の愛情だと思う」	1	2-3-4
17 「母親であるために自分の行動がかなり制限されている」	1	2-3-4
18 「子どもは人間として私と対等だ」	1	2-3-4

質問は以上です。ご協力どうもありがとうございました。このご回答は、お手数ですが同封の返信用封筒でご返送ください。